

水野秋彦  
延喜式祝詞諺解

下卷

特35

777

013869-003-7

特35-777

延喜式祝詞諺解

水野 秋彦/著

3冊

M17

ABB-0087



水野秋彦撰述

延喜式祝詞諺解

悠紀廼舍藏版

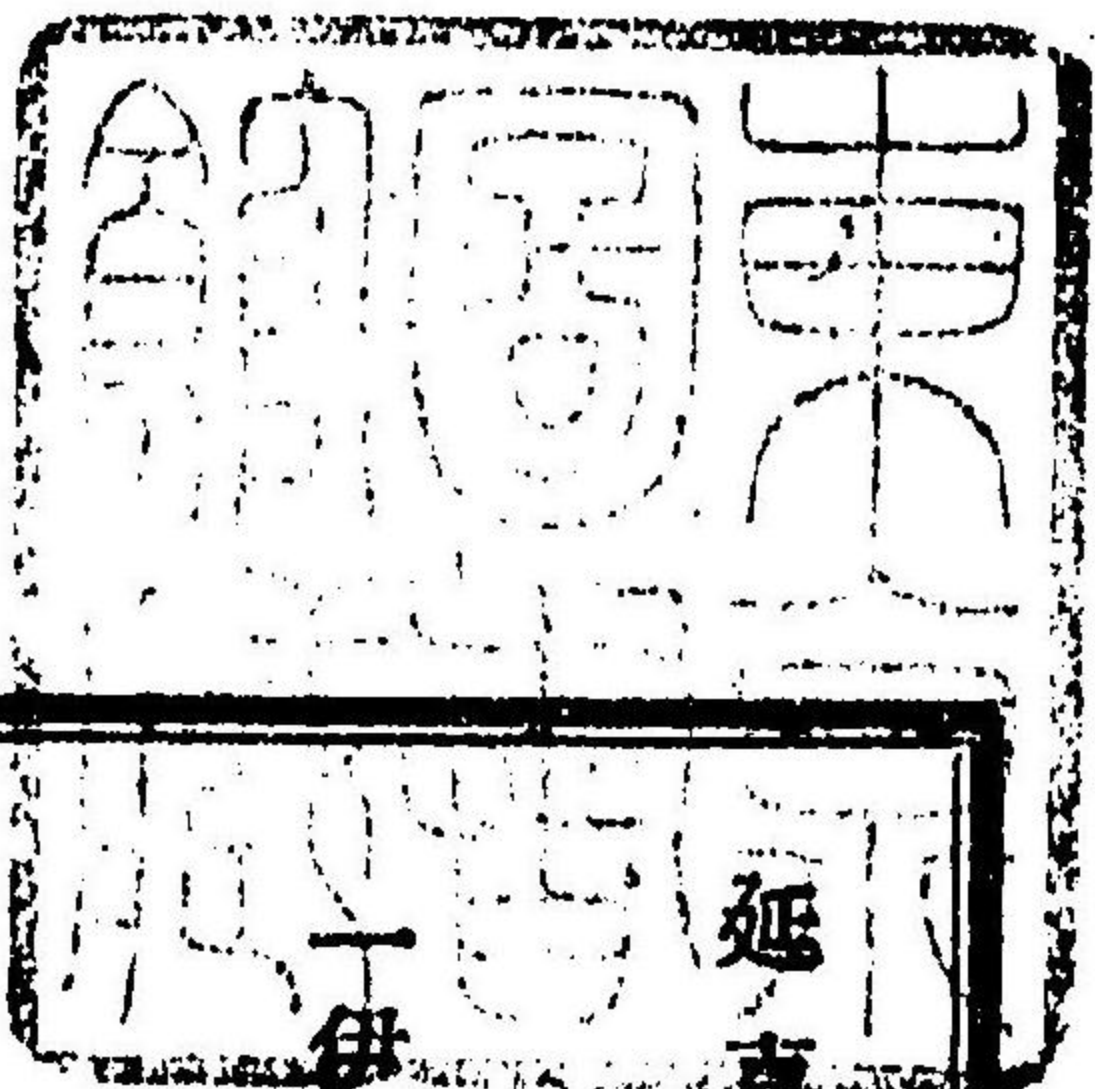
延喜式祝詞諺解下卷目錄

一伊勢太神宮	壹丁
一二月祈年祭六月十二月月次祭	同
一豐受宮	二丁
一四月神衣祭	同
一六月月次祭	四丁
一九月神嘗祭	六丁
一豐受宮同祭	七丁
一同神嘗祭	八丁
一齋內親奉入時	十丁

水野秋彦撰述

延喜式祝詞諺解

悠紀廼舍藏版



延喜式祝詞諺解下卷目錄

一伊勢太神宮	壹	丁
一二月祈年祭六月十二月月次祭	同	
一豐受官	二	丁
一四月神衣祭	同	
一六月月次祭	四	丁
一九月神嘗祭	六	丁
一豐受官同祭	七	丁
一同神嘗祭	八	丁
一齋內親奉入時	十	丁

一遷奉太神宮祝詞	十一丁
一遷却崇神祭	十二丁
一遣唐使時奉幣	十八丁
一出雲國造神賀詞	十九丁
附錄	
一中臣壽詞	廿九丁

延喜式祝詞諺解目錄下卷畢

延喜式祝詞諺解卷之下

常陸 水野秋彦撰述  
 讃岐 宮崎康斐校閱

○伊勢太神宮 イセオホミカミノミヤ  
伊勢兩所大神宮ノ諸祝詞ヲ部類セル所ナルニエ如此標セルナリ

○二月祈年六月十二月月次祭 ニケツノイノヒトシノヒトツキケンノハスノツキナヒノマツリ  
皇太神宮ノ二月ノ

祈年祭ト六月ト十二月トノ月次祭ノ祝詞

天皇我御命以 スノミカガオホミコトモナ 氏 ウヂ 天皇之大御 スノミカミノオホミカミ 度會乃 ツクヒノ 宇治乃 ウヂノ 五十 イソ

○神名式云伊勢國度會郡大神宮三年中三箇祭と云て殊に重するは六月十二月の月次祭と九月神嘗祭と也云々  
 ○考云こは殊に皇御孫命と有べきに臣民に宜坐る大命の如くあるはれずつかまし

○禮儀云神祇令に  
常祀之外須向諸  
社供幣帛者皆  
取五位以上下食  
者充唯伊勢神宮  
常祀亦同と有て  
古くは異姓の人  
をも用ゐらるた

まども後には中  
臣一姓の人を以  
て祭主に補せら  
れて他姓を用ゐ  
られぬ事となれり  
云々  
○大神宮式云豐受  
大神一座相殿三  
座  
○考云此所に右同  
祭といふ事落し  
ものなり前後ふ  
此類多し本のい  
ど亂れたりけむ  
○同云度會郡沼木  
郷山田原に坐す  
こと式に見ゆ○  
聖解云今按よ此  
所に鎮坐の事儀  
式帳に見えたり  
云々

鈴川上乃下津石根爾稱辭竟奉留皇太神

能大前爾申久○伊勢國度會郡ノ宇石ノ地ナル五十鈴川ノ川上ノ地下之岩ニ宮柱ヲ突立テ大宮ヲ仕ツテ稱贊辭ヲ

竟へ盡クレツ上齋キ奉ル皇大常毛進流二月祈年每歲ノ例御神ノ大ト尊キ御前ニ申ス

々ニ奉ル此ノ二月次祭唯以六月月次之辭相

換カフ月次祭ノ祝詞ニハ唯六月月次ト云詞ヲ以テ此大幣帛乎○△足リ處ノ二月祈年トイフ詞ニ取り替フルノミナリ

辨物ヲト尊キ某官位姓名乎為使天令捧持氏進給

布御命乎申給久止申○某ノ官某ノ位姓名トイフモノヲ御使トレテサレ上ゲ持タセテ獻ジ給

フ天皇ノ大御音ヲ申上ゲマスト白ス

○豐受宮トユケノミヤ豐受大神宮ノ二月ノ祈年祭ト六月十二月ノ月次祭ノ祝詞

天皇我御命以○天皇之大御音ヲ以テ度會乃山田原乃

下津石根爾稱辭竟奉流豐受皇神爾申久○

伊勢國度會郡沼木郷ナル山田原ノ地下之岩ニ宮柱ヲ突キ立テ大宮ヲ造リ仕ナ稱贊辭ヲ竟へ極ハメツ上齋キ奉ツル豐饌ノ名義ニマシマス皇神ニ白スハ

常毛進流二月祈年(月次祭唯以六月月

次之辭相換)大幣乎。某官位姓名乎爲使

天令捧持氏進給布御命乎申給久止申

以上前文ト全ク同シケ  
レバ引合セテ心得ヘレ

○四月神衣祭 四月十四日皇大神宮へ(ナガツキモナラフコレニ  
神衣ヲ奉ラル)祝詞 (九月准此)

九月十四日ノ神衣祭  
ノ祝詞モ此ニ倣フ

○神祇令云孟夏神  
衣祭 孟夏神衣祭  
也此神服等齋戒  
引調絲一織作神  
衣、又麻績連等  
績麻以織三敷和  
衣、以供三神明、  
故曰三神衣、  
同云孟夏神衣祭  
孟夏祭同、

○考云神祇令に云  
云この儀等式  
委しよて神服部  
が織は絹も赤引  
絲即重絲にて參  
河神戶より獻り  
て伊勢多氣郡の  
服部等服部郷に  
在て織るなり又  
麻績連等は同郡  
麻績村に在て麻  
もて織るなり式  
もて織るなり式  
麻績戸二十二畑  
といへり云々此  
和紗克妙右二氏  
の者始從三祭月  
一日一織作、至十  
四日伊勢、其の  
敷ハ大神宮和衣  
二十四疋克妙八  
十四疋あり云々  
神祇令云此祭四月  
九月共に十四日  
にあり云々此は  
皇大神宮と皇祭  
宮と限り行はる  
る神事なり○神  
衣祭の起源は神  
名秘書に織麻績  
式、皇大神宮坐

度會乃字治五十鈴川上爾大宮柱太敷立

天高天原爾千木高知天稱辭竟奉留天照

坐皇大神乃大前爾申久○度會郡ノ字治ノ地ナル五十鈴  
川ノ川上ニ大御舍柱ヲ太ト立

ヲ其柱ノ太キガ如クニ其官ヲ既知坐レ高天原即テ大空ニ千木ヲ高ク舉ゲ  
テソノ千木ノ高キガ如クニ其官ヲ高知坐サセ奉テ稱贊辭ヲ竟ヘ極ハメツ

上齋中率ル天照坐皇大御 服織麻績乃人等乃○天御鉾命ノ胤  
神ノ大ト尊キ御前ニ白ス

住ル麻績ノ約音ナル麻績部即大神宮ノ神戶ノ部ナル人々ガ常毛奉仕



り云々さて禰宜  
内人は職名にて  
神主と朝臣宿禰  
等の姓れ如し皇  
大神にては菟木  
田氏の人々悉く  
神主なると云々

○今接し御壽はオ  
ホモとモも訓ひ  
べく覺ゆれと且  
らく正調のま、  
を用たり

○諺云此文の如  
くにてと事足は  
す儀式帳及行事  
記にて常盤 爾堅  
磐 伊波比與佐  
志給比伊賀志御  
代爾云々とあり  
此方にて能く通  
えたり

○同云儀式帳には  
阿禮坐皇子等乃  
大御壽乎慈比給  
比とあり

○二所の乎毛は第  
一の新願なる御  
壽乎の乎に對へ  
るあり

○神祇令云凡神戶  
爾唐及田租者並  
充造神宮及供神  
調度云々

○考云神戶は此三  
部の外に藤原  
志安櫻鈴鹿河曲  
孫名にもあれど  
尋なるを尋く  
○同云大和に五十  
戸伊賀に二十戸  
志原に六十六戸  
尾張に四十六戸  
河に二十戸遠江  
に四十戸是等を  
大神の御厨の戸  
といふなり  
○同云大和の宇陀  
郡に二町伊賀の

辭ヲ竟へ極ハメツト齋キ奉ル天照坐皇大御神ノ大前ニ白レテ月次ノ  
幣帛ヲ奉ル此ノ天之祝詞ノ太祝詞ト尊ヲ祝詞ヲ今宣リ聞カレムルヲ 神

主部物忌等諸聞食止宣 ○大神官奉仕ノ神主姓ノ部ナ  
ル禰宜内人物忌役等ノ諸人

聞召レテ諸共ニ御前 (禰宜内人等共稱唯) 禰宜役内人  
ハ申セト宣リ聞カス 役ノ人等共

ニ唯ト返答ヲ申  
シテソレヲ聞ク

天皇 我御命 爾坐 ○天皇之大御壽ニテ祈リ  
給フニ任セソノ通りニ 御壽乎手

長乃御壽止 ○天皇ノ大御壽ヲ足  
長ノ大御壽命ニ 湯津如磐村常磐

堅磐 爾伊賀志御世 爾幸 閉給 比 ○五百箇ト多ク  
ノ磐群ノヤウ

阿禮坐皇子等 乎毛 惠  
御壽命ニ幸ハヘ下サレ ○祈願ノ第一

給 比 ○御生レ遊ハス皇子等ヲモ御  
惠ミ下ダサレ ○祈願ノ第二 百官人等天下四方

國能 百姓爾至 万天長平久 作食 留五 穀

乎毛 豐爾 令榮給 比 ○百官ト朝廷ニ仕奉ル官吏ノ人等天下四  
方ノ國中ノ人民ニ至ルマデガ永々年代

平ラケク作リテ食ヘル五穀ヲモ豐饒ニ  
十分ニ盛エサセ下サレ ○祈願ノ第三 護惠 比 幸給 止 ○上ノ三  
件ノ祈



伊賀郡に二町伊勢の桑名鈴鹿阿波志飯野度會郡々の中に四十二町一段なり是を大神の大御田とす  
 講義云二所大神宮とも年中盛儀みて供奉る中に此三箇祭と重き御祭なるが故に朝大御饌夕大御饌以下の供進物をすべて由貴とはいふ也止由氣宮儀式帳六月に始亥時至于丑時朝大御饌夕大御饌二度間量供とある本註に此由貴と記し其供奉所を湯貴備奉所といひ皇大神宮儀式帳にも此以十六日夜湯貴御饌祭仕奉と記し其料の稻を收るを湯貴御倉と云り云々御酒は大嘗祭に白黒の大御酒を奉る如く神宮にも黒白の大御酒の事なり云々

願ノ事ヲ守リ惠ミ  
 幸ハへ下サントア  
**三郡國國處處** 爾寄奉禮留神戶

人等能  
 ○度會多氣飯野ノ三神郡ソノ外諸國諸處ニテ  
 寄進奉ラレタル神戶即封戸ノ人民等ガ  
 常毛進留

御調絲由貴能御酒御贄乎如横山置足成

天○年々ノ例トシテ常々ニ奉ル御酒ノ絲又由貴ト殊ノ外ニ齋ミ酒メテ供進  
 ンタル齋忌ノ大御酒即チ黒白ノ御酒ヤ大贄即チ御饌ヲ始トシテ海川

山野ノ種々ノ美味物ヲ横タハレ  
**大中臣太玉串爾隱侍**

天○大神宮司タル大中臣ガ木綿ヲ賢木ニ着ケタル太ト貴ク  
 大キナル玉串ヲ持捧ゲアソノ玉串ニ覆ハレ隠レ侍リテ  
**今年六**

○同云右二宮にも此天津祝詞を申して幣帛を奉れど大神宮司の宜るなり  
 と言を換て申すなるべし 若て此詞

ツキノトカカマリナスカノヒノアサヒ  
**月十七日乃朝日乃豊榮登爾稱申事乎。**

今年ノ六月ノ十又七日ノ日ノ旭日ノ盤ト  
**神主部物忌等諸**

聞食止宣  
 ○神主ノ部ナル物忌等諸人ニ能ク  
**神主部共稱**

唯  
 神主部即チ爾宜内人物  
**荒祭官月讀官爾** 如是

久申進止宣  
 ○十八日ニ荒祭官十九日ニ月讀官ノ月次祭ニモ  
 如此即此祝詞ノ如ク申シテ其幣物ヲ奉レト

宣聞  
**神主部亦稱唯**  
 攝社掛リノ神主部等  
 又唯ト返答ヲ申ス

を其祭日ニ神主  
 其大前に申す  
 事なり云々止由  
 氣宮儀式帳以  
 十七日ニ高宮祭  
 供奉告刀申とあ  
 るよて知られた  
 り大神宮年中行  
 事十七日高宮御  
 祭事堪事之禰  
 宜申三刀刀  
 各衣 十八日荒祭  
 冠 御祭事 玉串大  
 宮御祭事 内八申  
 刀と見たる是  
 也云々儀式帳に  
 以十九日未時  
 月讀官祭行事四  
 神殿在二宮二  
 殿一殿坐伊佐那  
 伊佐那 東方二神  
 美尊 東方二神  
 殿在之中一殿坐  
 月讀神一殿坐同  
 神竟魂云々禰宜  
 告刀申申畢禰宜  
 幣帛并御馬等波  
 即其宮内人爾預  
 仕奉云々

神祇令云季秋神嘗祭神衣候日一便祭

神祇令云神嘗祭神田より神宮に其奉る當年の神物をもて祭り奉るか中に新穀を以始て大御饌を忌炊き奉り又白黒酒に醸し供奉る神事なるが故に神嘗と云て朝廷の神嘗祭と其事異ならず云々  
考云大神宮式も九月神嘗祭但朝廷在二内 大神宮御衣三匹 禰宜預封戸糸二潔 云々  
式及又云米三石三斗 糯米拾石 供料米廿五石 遺誓石神酒廿三石 諸國の神祝と以隨道て買る事見  
ゆ小税二百三十束 以二一 把 大税一百八十束 以二五 把 斤税一千二百二拾二束 此外種々あり云々

○神嘗云二所大神宮とモに年中諸祭の中に三節祭を重とし其三節祭の中に此神嘗祭を以殊と重くする所なり續紀に延暦九年九月甲戌奉伊勢大神宮相嘗幣帛と見えたり朝廷に於ても其式甚嚴重なり幣帛使を立らる大内の御神事の新年月次新嘗とも中祀の一也云々今日は両宮を限れる御祭也○四時祭式も神嘗祭の條に右當月十一日平旦天皇臨大極殿一奉幣事見儀式其使諸王五位以上及神祇官中臣忌部官各一人給當色一載幣五人使從者三人各給潔衣布一端但齊王參入之時就御座於大極殿事見儀式とありて齊内親王伊勢に赴かせ玉ふ年は大極殿にて行はれ八省院に陣むる時は神祇官廳にて行はる事なり云々○大神宮式に九月神嘗祭云々と幣物の事を記せる終に右月十七日祭大神宮禰宜大内人各著明衣分頭左右宮司立中次使忌部捧幣次馬次使中臣次使王入就内院位位使中臣申詔刀訖亦神宮司宣祝詞餘儀同月次祭と見えたり云々

### ○九月神嘗祭

皇大神宮ノ九月十七日ノ神嘗祭ニ付テ朝廷ヨリ奉幣セラルル祝詞

皇御孫命御命以伊勢能度會

五十鈴河上爾稱辭竟奉天照坐皇太神

能大前爾申給久伊勢國ノ度會郡ノ五十鈴川上ニ稱贊ノ詞ヲ竟極メテ奉齋スル天照坐皇大御神ノ大ト尊キ御

前ニ御白常毛進流九月之神嘗乃大幣帛乎

神嘗祭ノ大ト満足セル幣物ヲ某官某位某王中臣某

官某位某姓名乎爲使氏何官何位某王神祇官ノ中臣何官

忌部弱肩爾太襪取懸

持齋波里令捧持氏進給布御命乎申給

久止申神祇官ノ忌部ガ肩ノツガヒメ故ニ弱トイフ其肩ニ太キ手助ヲ執リ掛ケテ持ト十分ニ齋マハリ指上持タセテ奉獻レ遊バサル

大御言ヲ御白シナサルト白ス

○考云式も又云々  
 度會同祭は御衣  
 二匹云々小税一  
 百廿東大税八十  
 東斤税八百東こ  
 の外其数は減め  
 れば皆そなはれ  
 り阿宮攝社にも  
 各進る物ありか  
 くて左丑日右月  
 十六日祭度會宮  
 云々

○豊受宮同祭

トユクノミヤノオナシマツル  
 豊受大神宮ノ九月十六日ノ神嘗  
 祭ニ就テ朝廷ヨリ奉幣ノ祝詞

天皇 我御命以 氏度會能 山田原 爾稱辭竟

奉流 皇神前 爾申給 久  
○天皇之大御言以テ度會郡山田原  
 二稱贊辭ヲ竟ヘ極メツル齋奉ル

皇神前ニ御常毛進留 九月之神嘗能 大幣帛 乎  
白シナサル

某官某位某王中臣某官某位某姓

名乎爲使 氏忌部弱肩 爾太襪取懸持齋

波理 令捧持 氏進給 布御命 乎申給 久止

申  
○以上前文ト全ク同シケ  
 レバ引合セテ心得ベレ

○同神嘗祭  
オナシマツル  
 上ニ同レク両所大神  
 宮ノ神嘗祭ノ祝詞

度會 乃字治能 五十鈴 乃川上 爾大宮柱太

敷立 氏高天原 爾千木高知 天稱辭竟 奉留

天照坐皇太神 乃大前 爾申進留 天津祝

○讀義云此之ニ所  
 大神宮に通して  
 申詞なる事六月  
 月次祭又於るか  
 如し此ある同字  
 と上のニを合せ  
 て受ふる事既よ  
 云り云々上なる  
 と使中臣の申す  
 所及びして唯幣帛  
 の事を稱へり此  
 文は大神宮司の  
 宣る所にして御  
 酒御費懸税とを  
 奉て神嘗の由を  
 いへるなり

●按云御壽を月次祭の條にてはしばらく正副のまきにオホミイノナト訓みたれど次の伊賀志御世爾の御世といふ

詞乃太祝詞乎神主部物忌等諸聞食止

宣ノ度會郡ノ宇治ノ地ナル五十餘川ノ川上ニ大宮柱ヲ太領立高天原ニ千木高知領ヲ稱贊辭ヲ竟ヘ奉リツム齋ヒ奉ル天照坐皇大御神ノ大前ニ

申シテ神嘗ノ幣物ヲ奉ル此ノ天之祝詞ノ太ト尊キ祝詞ヲ今宣リ聞カスヲ神主部タル物忌等諸人聞シ食セト大神宮司ニテ宣リテ聞カス

宜内人等共稱唯(禰宜内人等一同ニ唯ト返答シテソノヲ聞ク)

天皇我御命爾坐御壽乎手長乃御壽止湯

津如磐村常磐堅磐爾伊賀志御世爾幸閑

給比阿禮坐皇子等乎惠給比百官人等

天下四方國乃百姓爾至万天長平久護

惠美幸倍給止(天皇之大御尊ニテ祈ラセ給フニ任カセ天皇ノ大御壽ヲ足長ノ御壽命ニ五百之磐祥ノ如ク常

磐ノヤウニ堅磐ノヤウニ盛大之御壽命ニ幸ハヘ下サレ又御生レ遊バヌ皇子等ヲモ御惠ミ下サレ又朝廷ニ仕奉ル百官人等天下四方ノ國中ノ人民ニ

至ルマデモ永代平カニ護リ惠ミ幸ハヘ下サレト○以三郡國國處上スベテハ六月月次祭ノ文ト同シ引合セテ見ルベシ

處寄奉禮留神戸人等能常毛進留由紀能

詞へのついでを思ふにオホミイノとよむ方まさをて聞ゆれば今はしか訓みつ  
●按に此文大かた六月月次祭の文と同しきを長平久の下に作食留五穀乎豐爾合祭給比といふ句のなきは神嘗祭と五穀すでに成熟て後の事なればなるべし  
●考云税の本をいは、賦役令義解に凡官稻之源出自田租一即分爲三一日大税二日叔穀三日都稻也此税は一國一國

に貯置きたるへ  
 ば十五萬東の稻  
 を民に割付て貸  
 したる利を取て  
 京へ上る最と稱  
 敷といふ云々右  
 の大税と田力と  
 云は悉百姓の借  
 て田を耕す力と  
 する由也然るを  
 神田の稻を貸す  
 事は無れと愛に  
 は公田の税の名  
 を借て書しのみ  
 云々

○神農云懸税は世  
 紀に所謂懸久眞  
 也大神宮儀式帳  
 に細税大半斤太  
 斤といひ止由氣  
 宮儀式帳に細税  
 稻大税稻懸税稻  
 といひ大神宮式

に小税大税斤税  
 といひて合て三  
 等也云々懸久眞  
 と云は右の三等  
 の差別を立すし  
 ていふ稱なり云  
 々さて税は懸内  
 外の玉垣と懸奉  
 ること二所大神  
 宮儀式帳に見え  
 たる所なるが神  
 田の御稻は拔穂  
 の任正殿下  
 に置奉り御倉に  
 納奉る例也云々

○今按にナカラの  
 ナは納給などの  
 ナにて束包など  
 のツムも通ふナ  
 カラは蓋にてた  
 い東稻の蔵にや  
 あらむ

御酒御贄懸税千税餘五百税乎如横山久

置足成天大<sup>オホ</sup>中<sup>ナカ</sup>臣<sup>シ</sup>太<sup>オホ</sup>玉<sup>タマ</sup>串<sup>マツ</sup>爾<sup>ニ</sup>隱<sup>カクレ</sup>侍<sup>シ</sup>天<sup>アメ</sup>野<sup>ノ</sup>三<sup>ミ</sup>神<sup>カミ</sup>郡<sup>ノ</sup>

其他諸國諸處ニ寄進レ奉テフル神戶即神封ノ人民ガ毎歲ノ例トレテ常々  
 率ル由貴ト殊更ニ齋ミ清メテ供進セル齋忌ノ大御酒ト御饌ヲ始メ種々ノ

美味ヲ備ヘタル大賈又新稻ヲ千税五百税ト數多束チテ懸祝ト懸ケテ横山  
 トモ見ユルヤウニ置キ足ラセテサテ又幣帛トテハ大神官司ノ大<sup>オホ</sup>中<sup>ナカ</sup>臣<sup>シ</sup>ガ賢

木ニ木綿ヲ取附ケテ太ト大キク貴イ玉串ヲ持  
 ナ捧ゲテ其玉串ニ身ヲ覆ハレテ下ニ隱レ侍テ  
 今年九月十

七日朝日豐榮登爾天津祝詞乃太祝詞辭

乎稱申事乎神主部物忌等諸聞食止宣

今年ノ九月ノ十又七日ノ日ノ旭日ガ豊トユタカニ榮エ上ル刻限ニ此ノ天  
 之祝詞ト愛タク太祝詞ト尊キ祝詞言テ御前ヘ稱ヘ申上ル事ヲ神主姓ノ部

ナル物忌役ノ人等諸人(禰宜内人等稱唯)禰宜内人物忌等  
 聞レ食セト宣リ聞カス共共唯ト返答ス

荒祭宮月讀宮爾毛如此久申進止宣

ス荒祭月讀兩宮ヘモ此天之祝詞ヲ申(神主部共稱唯)禰宜内  
 レテ其幣物ヲ奉レヨト宣リ聞カス

人物忌等ノ人々一  
 同ニ唯ト返答ス





其時を得て行はる、なり

○遷却崇神祭は祭式をもて推すに遷却崇神祭と云條となしと雖云々此詞文と其時時諸祭の帶物とを合せて讀み得べき凡の例は皆ひて今此を引合せ見るに似着し物種々あり其一は露庭神祭の帶物此詞に載る所と大に同じしが終に云々若新有件飲祭、移山遷却崇神祭の一也とは知られり云々二には同式に羅城御願といふ一條あり云云其羅城御願に次ては八衢祭云々と見えたる帶物の大凡此詞に同じきと云々三

に之臨時祭式に宮城四隅疫神祭云々數内十處疫神祭云々其疫神といふと疫を防ぐ神にて所謂る障神祭なる云々

○此の千別氏の氏もしたいに天降へ引ついでてよむべし氏にて切れば語とのはず

名ノ人ヲ差シ定メ遣ハシテ御奉納遊ハサルノ事ノ様ヲ御申ナサルト申ス

○遷却崇神祭 内裏へ向ヒテ崇テオス神等ヲ遠所へ遷シ却ル臨時ノ祭ノ祝詞

高天之原爾神留坐氏事始給志神漏伎神

漏美能命以氏 天上高天原ノ神界ニ神留ト靈徳ミナムトテ御鎮坐ナサセラレテ世ニフリトアル事物ノ本源ヲ御

起シ遊ハレ御始メ遊ハサレタ神之男君即高皇天之高市爾八産靈皇神之女君即天照大御神ノ御曾ナリテ

百万神等乎神集集給比神議議給氏 天之高市即ナ

天界高天原ノ高ト宜キ場所ニテ八百万ノ神々ヲ多ク集ムベクシテ市ト名クベキ場所即天安河ノ河原ノ地ニ大數ヲ舉テイハバ八百萬トセイフベク

多數ノ天神々等ヲ神ト御集ヘニ御集我皇御孫之尊 豐

葦原能水穗之國乎安國止平氣久所知食

止 吾皇御孫尊即通々藝命ハ豐ト美稱スベキ葦原之瑞國即ナ大日天之本國ヲ平穩ナル安國ニ平ヲケク知治看サレヨト仰セラレテ

磐座放氏天之八重雲乎伊頭之千別支爾

千別氏天降所寄奉志時爾 天即ナ高天原ノ磐ト堅固ナル御座ヲ離ナテ天路ニ



○按に磐座は齋座の意にても有り

○神議云我皇孫之靈波云々天より降りつぎ五へる大綱を先こ、にわく云れきて次に荒ふる神云云の事を演て小目とせるなり

廣ク天之彌重雲ヲ被威ト天神ノ御威勢スルドク道排ニ道排テ大降  
ヲセテ天トテ皇御孫命ノ御身ニ所寄ト寄セ附ケ奉リナサレタ時ニ  
誰

神乎先遣 波志 水穗國能 荒振神等 乎神攘

攘平 止氣 武 神議議給時 爾 ○何神ヲ皇孫ヨリマツ先ニ遣ハ  
レテ瑞穂國中ナル荒林之惡神

等ヲ神拂ト尊ク畏ユク御攘ヒ攘ニ御攘ヒ斥ケテ 諸神等皆量

申久。天穗日之命 乎遣而平 止氣 武 申支 ○諸神等ガ  
皆共々ニ

嗣ヲ揃ヘテ評定ノ事ヲ申上ルハ天照大御神ノ御子トマシマス天穗日之命  
ヲ御勅使トシテ御遣ハシナサレテ違背スル神ノ心ヲ此方ヘ令向ント申レ

上。是以天降遣時爾。此神波返言不申。氏。○ソ  
リ

テ其ノ評議ノ計策ヲ御採用遊パン天穗日命ヲ御遣ハシナサレ 次遣  
タ所ガ此神即テ穗日命ハ急々ニハ復命即御返辭ヲ奏サズレテ

志 健三熊之命 毛 隨父事 氏 返言不申 次  
○其

ニ御評議ヲ以テ御遣ハレノ第二ノ御勅使健三熊之命モ其父 又遣 志  
タル穗日命ノ言ハル、爾ニ從ヒテ早速ニハ御返事ヲ申サズ

天若彦 毛 返言不申 氏。高津鳥 殃 爾 依 氏

立處 爾 身 亡 支 ○ソニテ又追ツギテ御遣ハレナサレタ第三ノ御  
使ノ天若彦モ同様御返辭ヲ白サズソレノミカ

○神傳云今按に日本紀に大甕阪三熊之大人亦名武三熊之大人とありこは古事記なる建比良命と同時なる事古史傳祝詞讀義等に委し  
○神傳云高津鳥殃云々こ天神の御罰なれと此と殊といふべからねども云々こは國の神の事

所由は知らざる  
間の時を以傳へ  
るなり云々  
●同云更字大に力  
あり心を留めて  
見るべきなり

●神代紀一書云故  
經津主神以時神  
爲御導用波御平  
有逆命者即加新  
賦誦順者仍加嘉  
美云々

天上ヨリノ御使タリシ無名雄ヲ射殺シタニエ高皇產靈尊ノ御  
罰ナル返矢即高津島之災ニ因テ立處直株ニ身亡テ死去ニケリ  
是以天

津神能御言以氏更量給氏○サテ三度ノ御使有ノ  
如クナル故ニ是以ソ

ユテ天之神即テ天照大御神高皇產靈尊ノ御言ヲ以テ八  
百万ノ神ヲ會ヘサセラレテ又更ニ御評議ヲ御遂遊パン  
經津主命

健雷命二柱神等乎天降給氏○此度ハ經津主命  
健御雷命ノ二座

之ノ神等ヲ葦原中國平定ノ御使ト御アラフ荒振神等乎  
神攘攘  
定メ遊ハサレ天上ヨリ令天降給ヒテ

給比神和和給氏○命ニ逆ヒテ暴動之邪神等ヲ神攘ヒニ御攘  
ヒナサレ歸順スル善神ハ神和和ト褒賞喜

サレテア 語問 志 磐根樹立草之片葉 毛 語止 氏○  
ハセナ コト ヒシ  
サレテ

邪神ノ暴動ニ感ゼラレテ小ザカレク音語セシ岩石木株草ノ片葉  
ナドノ聊ナル兇物マデモ其音語ヲ令止テ餘塵モナク清メテ後ニ  
皇御

孫之尊 乎 天降所寄奉 支 ○皇孫尊即通々藝尊様ヲ無事平  
安ニ天降シ其國ヲ其御身ニ寄

セ附ケ奉リ 如此久 天降所寄奉 志 四方之國中  
ナサレケリ

止 大倭日高見之國 乎 安國 止 定奉 氏 ○是ノ如  
クニ天

降レ寄セ奉テ瑞穂國ノ四方ノ國々ノ中央ナリトテ大倭即今ノ畿内ナル大  
和ノ日高見之國ト打開ケテメグレル山々ノ遠キ故ニ日輪ヲ空ニ高ク見ル

イト宜レキ國ヲ此處ゾ安樂國ト  
下津磐根爾宮柱太敷立

高天之原爾千木高知氏天之御蔭日之

御蔭止仕奉氏其ノ大和國內ノ地下之巖石ニ深ク掘レテ太領  
マスベキ宮柱ヲ太ク突立テ高天原即大空ニ構

安國止平氣久風ヲ高領マスベク高ク舉ゲテ天空ヲ蔽フ真陰日ヲ  
遮ル真陰ト御住居遊ハサルト爲ト御殿ヲ造營仕テ

所知食武皇御孫之尊乃天御舍之内仁坐

須皇神等其内ニ大坐マシテ上ニ云ヘル如ク平定セシ天下万国  
ヲ今ヨリ千万秋ニ至ルマテ安國ト平穩靜謐ニ所治サ

○神靈云何れの神  
の御心とも知れ  
ぬもあむが爲に  
廣く皇神等とい  
へり

○神靈云何れの神  
の御心とも知れ  
ぬもあむが爲に  
廣く皇神等とい  
へり

レウトスル皇御真之御事即天子孫ノ天之ト尊ト奉リ受テ奉ルベキ御在  
所ノ名義ナル御殿ノ内ニ何時トナク入り來テ何神トモ定カニ知ラレズ坐

ス皇神荒備給比健備給比崇給事無志氏等ハ

高天之原爾始志アフレク暴ヒナサレワルメケク健ヒナサレ  
御所ヘ對ヒ奉テ崇リナサルムコトナクシテ

事乎神奈我良毛所知食氏高天原ノ神界ニテ皇祖  
天神ノ始メ給ヒテ皇御

神直日大孫命ヘ御傳ヘ遊バサレレ此ノ御祭事ノ事ガラテ皇神等  
ハ固リ神ニ坐マセハ神隨毛神ト坐スマムニ知レメレテ

直日爾直志給比氏暴ヒ健ヒ崇リレ禍事ハ神直日大直日  
ノ神ガ惡テモ善ニ直レ給フ如クニ御

古事記云國大  
 御主傳云々故  
 宇志波部津原  
 中國書云々  
 方書云宇志波  
 古伊麻須能大  
 御神等  
 考云丹波地主王  
 と申す美知宇斯  
 王とも書たるを  
 ひかへて宇志は  
 主の意なるを知  
 り云々

肥傳云波久と佩  
 刀若否なとの波  
 久と同じく身に  
 着て持つ意なら  
 ひわ續きよべし

直レナサシテ其禱事ヲ  
 御所ノ外ヘ持去リテ  
 自此地ニ四方乎見霧山川能

清地雨遷出坐氏吾地止宇須波伎坐世止

此ノ所ニ御坐テ崇ナド爲給ヘンヨリハイツソノコト別ニ四方ヲ晴々ト見  
 ハラカス山ヤ川ノスガムト清潔ナル宜キ場所ヘ遷リ御出マレテソノ所

ヲ御自分ノ鎮坐ノ場所  
 進幣帛者明妙照妙和妙荒  
 ト主領テ御出マセト

妙爾備奉氏  
 只今奉ル幣物ハ色ノ見事ニ明絹光ノ清ラ  
 ニ照布精絹粗布ト殘ナク御備ヘマツレテ  
 見明

物止鏡。翫物止玉。射放物止弓矢。打斷物

止太刀。馳出物止御馬  
 御覽シテ御心ヲ明ラメ霧ヲス物  
 トテハ鏡御手ニ持テ受玩ビ心ヲ

慰メ給フ物トテハ玉射テ放ツ物トテハ弓矢物ヲウ  
 ナ斷ツ物トテハ太刀勇マレク馳出ル物トテハ御馬  
 御酒者廳戸高

知應腹滿雙氏米爾毛穎爾毛  
 御神酒ハ麴ノ口方高  
 ラカニスエ麴ノ腹ニ

十分ニ酒ヲ滿ダセテソノ上ニ御饌トシテ  
 山爾住物者毛乃和  
 ハ和稻ナル米ニテモ荒稻ナル穎ニテモ

物毛能荒物。大野原爾生物者甘菜辛菜。

青海原爾住物者鯖廣物鯖狹物。奥津海菜



初めて其漢を撈  
出ると云云異國  
御使遣さるゝ事  
推古天皇十五年  
紀に大禮小野妹  
子遣之國とあり  
り云々  
○神名式云攝津國  
住吉郡住吉坐  
神社四座  
○請義云住吉社に  
附て祭る事は古  
事記轉國御言向  
の御論言に是天  
照大神神之御心  
者亦底筒之男  
中筒之男上筒之  
男三柱大神者也  
云々我之御魂  
坐于船上二面云  
云以可渡とある  
如く彼韓國を歸  
せ玉ふこと天照  
大神神の大御心  
と專ら此住吉大  
神の執行はせ給  
ひし古事のある  
故に徒に船路の  
守護のみならず  
凡て外國の事に

此時より始めて預り給ふ所謂あるが故なり云々○零解云今按に考にこの頃難波の湊塞れる事ありて播磨の津より  
發ひと議り給ひしお神の御誨ありて忽船津の開けし時の事と見えたりといひ云々講義に古事記に仁徳天皇の御代  
墨江津を定め玉ふとある所の傳によりて住吉社をも住吉津をも今の所に遷し給ひしと仁徳天皇の御代にて凡て此  
大神は異國の事  
を知看す故に唐  
國へ御使遣とす  
時も殊に此津よ  
り發船するなる  
べき事を擧げ此  
詞の源由と三韓  
の日本府の宰を  
遣す時に起れる  
なるべき事を委  
委しく見えたり  
と處狭ければ引  
出す  
○考云こは御使の  
宣る詞也又此時  
住吉の祝部の申  
す祝詞も有つら  
む万葉十九天  
平五年遣唐使に  
餞する時の歌に  
住吉に伊都久祝  
が神言と行得も

皇御孫尊乃御命以氏住吉爾稱辭竟奉留

皇神等乃前爾申賜久○皇御其之御事即天子様ノ大御言  
ナ以テ攝津國住吉郡住吉ノ地ニ

神德桐養ノ嗣ナ竟ヘ盡シツム齋キマツル底筒男  
中筒男表筒男ノ皇神等ノ前ニ御白レナサルムハ  
大唐爾使遣佐

止爲爾依船居無氏○唐土ヘ朝廷ヨリ遣唐使ヲ遣ハサント爲  
ルニ船ヲ居エ置イテ乗出スベキ宜レキ

津ガ無イ播磨國與理船乘爲氏使者遣止佐牟

所念行間爾○播磨國ノ室津ナドヨリ船ニ乘リ込ミ船居ヲ開テ出  
帆レテ遣唐使ハ遣ハサレウト御心配遊サレ思召サ

ルム皇神命以氏船居波吾作牟止教悟給

比支○皇ト尊トキ住吉ノ大神ノ御言以テ船ヲ乘リ出スベキ船居即  
ナ津ハ吾ガ便利宜シク造ラウト朝廷ヘ教ヘ諭シ給ヒケリ

悟給比那我良船居作給波部禮悅己備嘉志

美○サテ教ヘ諭シ給ヒソノ通りニイト宜シキ船居ナル住ノ津  
ナ御造リ下サレタレバソレナ悦ビ嘉ンデソノ禮謝カタガタ

乃幣帛乎官位姓名爾令捧賈氏進奉久止

來得も船之早け  
じ云々

○櫻解云今接に出  
雲國造を任せら  
る、儀式詳に貞  
觀儀式に見えた  
り太政官曹司廳  
にてある也さて  
其後に神祇官廳  
にて國造に負幸  
物を賜ふ先づ太  
刀一次又絲綉絹  
甘餅等次々に  
賜ふ云々さて國  
に歸りて齋する  
事一年にて京に  
上り神寶を獻り  
て壽詞を奏し又  
後齋一年にして

再び入朝し神壽  
を奏す事初の如  
し云々  
○臨時祭式云神祇  
官長自監視預ト  
吉日一申官奏聞  
○大政官式云神祇  
官預擇吉日一申  
官奏聞

申。○此度ノ遺唐使ノ無事ヲ祈ルソノ禮賢ノ幣物ヲ神祇官ノ奉幣  
使何ノ官何ノ位何姓何名ノ人ニ捧グ持タシメテ奉ルト白ス

○出雲國造神賀詞  
出雲國ニ住居スル御臣ノ義ナル出  
雲國造ガ朝廷ヨリ國造ニ任ゼラレ

テ其時負幸物ト云テ拜領シテ歸國シ一年間  
齋シテ神寶ヲ持參シ朝廷ヘ奏ス吉詞ノ文  
出雲國造

者穗日命之後也  
出雲ノ國造ハ神代紀ニ天穗日命是  
出雲臣土師連等祖也ト云ヒ古事記

ニ天菩比命之子建比良鳥命此出雲國造等之祖也トア  
ル如ク天照大神ノ御子トマス天穗日命ノ子孫ナリ

八十日日波在止毛今日能生日能足日爾

大凡ニ數フレバ八十日日トイフベキホド日數ハ數多アルナレドモ其中ニ  
モ神祇官ニテトヘ定メ大政官ニテ撰ビ定メレ今日ノ生ト生キ榮ユル日足  
ト足り満タル日ヨト  
出雲國造姓名恐美恐美毛  
稱ヘツベキ吉日ニ

申賜久  
出雲國造何某畏ユマリ畏ユマリテ申上マス○姓名カケマ  
トアル所ヘハ當時ノ人名ヲ慥ニ書入ルヨトナリ  
挂久

毛畏岐明御神止大八島國所知食須天皇

命乃大御世乎手長能大御世止齋止言ノ

掛ケマクモ畏キ即テ口頭ニテ稱レ奉ラシメオソロシキ現之御神即テ現ニ  
此世ニ坐マス御神ト尊ク御出遊パレテ古稱ニ大八洲國ト稱レ來ル大日本

國ヲ治レ食ス皇之御事即チ天子様ノ大ト  
尊キ御壽命ヲ足長ノ大御壽命ニ守護フト△  
**若後齋時者加後**

初度ノ齋終テ又更ニ一年間ノ潔齋シテ二度ノ齋詞ヲ奏スル  
字)齋即チ後齋ノ時ニハ此處ノ語ヲ手長能大御世登齋後齋登爲氏ト云ヒ

後ノ字 爲氏 仕リテ  
**出雲國** 乃 青垣山内 爾 下津

石根 爾 宮柱太敷立氏 高天原 爾 千木高知

坐須 出雲ノ國ノ色青キ垣ノヤウニ繞リ連レル山ノ中ニ地下之岩ニ宮柱  
ヲ太ク立テ其宮ヲ太治キ高天原即チ大空ニ博風ヲ高クアゲテ其宮

伊射那伎 乃 日眞名子 加夫呂伎熊野

出雲風土記云伊  
斐奈根乃麻奈子  
坐熊野加武呂乃  
命云々

**大神櫛御氣野命** 伊佐那岐命ノ靈真之子ト殊ニ寵愛シ給ヒ  
御子ニテ神之男君ト尊ミ奉ル出雲國意

宇郡熊野神社ニ坐マス大神其社ニテ奇大主御  
事ノ名義ヲ以テ尊稱スル神靈即チ須佐之男命 **國作坐 志 大穴**

**持命二柱神乎始天** 須佐之男命ノ仰セテ受テ國作トテ國  
土經營ヲ遊バサレテ神即チ出雲郡杵

築大社マタ天日隅宮トモ申上ル宮ニ坐マス大名 **百八十六社坐**  
持命以上熊野ト杵築ト二座ノ大神ヲ始メトレテ

**皇神等乎** 上ノ二社ノ外ニ神祇官ノ帳ニ入りタル出雲國中 **某甲**  
ノ諸社其數百八十又六社ノ皇ト崇ムル神等ヲ

**我弱肩爾太禰取挂天** 其名ハ某ガ弱肩即チツガヒメノ  
柔ニハタラク肩ニ太手切ヲ執リ

○方葉集七云人在  
者母最愛子曾麻  
毛吉木之川邊之  
妹與背之山  
○後釋云加夫呂岐  
は神祖あり須佐  
之男大神と大名  
持命の祖神と坐  
が故に出雲國に  
て之殊にかく申  
す也  
○神名式云出雲國  
意宇郡熊野坐神  
社名神  
○同云出雲郡杵築  
大社名神  
○講義云神名式に  
出雲國一百八十  
七座 大二座小百  
八十五座  
云々風土記には



合神社三百九十  
九所一百八十四  
所在神祇官二百  
十五所不在神祇  
官とわれは此詞  
にては二社加は  
り神名式にては  
三社増加したる  
也  
○後釋云緒と結  
といふから云る  
にて即木綿麻な  
り云々  
○同云氣字を秘に  
誤れる也云々  
○釋義云眞屋は齋  
屋にて國造の齋  
館の中にて御饌  
御酒を調る屋を  
云なるべし

○按に刈と齋草字  
を受け敷と伊豆  
席登を受たる也  
○後釋云齋和と云  
も只變て和に  
別に意あるも非  
す云々万葉二に  
哭澤之神社爾三  
輪須惠云々  
○同云志靜米は威  
人志靜米を誤れ  
るなりと云る然  
るべし  
○同云是までと此  
吉詞の序の如し  
○考云こきより神  
賀の詞なり  
○釋義云今按に神  
王を古くカン

カケテ○某中トアル處  
ハ國造ノ名ノミ云ナリ  
伊都幣能緒結天乃美賀祕

冠利天  
○伊都ト清ワカニ齋ミ清メタル木綿カ又ハ木綿ト麻トチ交ヘタ  
ル物カナ即テ緒ト云アソレテ國造ノ髮ニ結ビツケテ木綿糺ト

イフ物ニレテ其鬘ヲ天空ヲ覆イ  
フ眞蔭ソト頭ノウヘニ冠リア  
伊豆能眞屋爾麤草乎伊

豆席登刈敷支天  
○伊豆ト麤カニ齋清メタル眞屋即テ國造ノ  
齋舎ノ中ニ物ノ穢ヲウケメ生草ヲ伊豆ト

清ワカナル席筵ト  
レテ刈リ取テ敷テ  
伊都閉黒益之天能暁和爾齋許

母利氏  
○伊都ト清メタル鳩ナドチ火ヲ燒キノソレノ尻ヲ令黒テ御饌物煮  
テ炊キ天之暁和即齋齋ニ御酒ヲ醸ユム等ノ事ノ爲ニ齋舎ノ中

ニ齋ミ籠  
志都宮爾志靜米仕奉氏  
○上ニイヘル熊野杵  
築以下出雲國內ノ

官社スベテノ皇神等ヲ齋舎ナル鎮宮ニ招キ奉リ饌メ奉テ齋ノ  
祭ヲ仕奉テ○一年間ノ齋事モスミ奉獻ノ神饗等モ調ヒタレバ  
朝日能

豐榮登爾伊波比乃返事能神賀吉詞奏賜

ハシトマサス○旭日ノ豐ト榮エ上ル宜キ時刻ニ前ニ朝廷ヨリ幸貨物ヲ賜  
止久奏  
ヒテ式ノ如ク仕ツレト仰セラレタル齋事ノ復命即テ御返事

ナル神賀壽ノ吉詞ヲ  
申上ゲマスト奏問ス

高天能神王高御魂神魂命能  
○高天即テ高天原ノ  
神界ニ坐ス神王ト

オヤと訓み考に  
はカフロキと訓  
れ後釋には神祖  
の誤なりといと  
れ古史傳にてカ  
フロと訓むべき  
由いはれ釋義に  
は字と元のまゝ  
にてカフロキオヤ  
と訓むべしとい  
り云々

後釋云事避と決  
りて後の誤にて  
事依あるべし必  
事依と云はでと  
叶ぬ所なり云々

後釋云水沸はミ  
ナツキと訓べし  
昔沸也古事記に  
惡神之音如狹蟻  
皆涌萬物之妖悉  
發云々  
○釋義云愛の内に  
て火を燒く如く  
圓々としたる火  
球となりて邪神  
の荒ぶるにて今  
も稀々に闇夜に  
光物として虚空を  
飛廻ることの有  
る云々

尊稱奉ル高皇產靈尊神  
皇御孫命爾  
天下大八島國乎

事避奉之時  
○皇御眞之御事即皇孫天忍穗耳命ニ天下大八洲國即  
地球大日本國ヲ御授ケ遊ハシテ其ノ政治シ

テ所領メス事ヲ皇孫ノ御身ニ  
任レ寄セ奉リナサレタ時ニ  
出雲臣等 我 遠祖天穗比

命乎國體見爾遣時  
爾○出雲氏ニテ尸ハ臣ト云人々等ガ遠之  
祖タル天穗日命ヲヒト先天下大八洲

國ノ風土形勢視察即十國體  
見ニ御遣ハシナサレタ時ニ  
天能八重雲 乎 押別氏 天翔

國翔氏 天下 乎 見廻氏 返事申給 久  
○天竺ニ塵ケ  
ル彌重雲ヲ

排テ虚空ヲ飛翔リ國土ヲ飛翔リ彼方是方ト往返レ  
テ天下中ノ形勢ヲ視察巡廻テ返音ヲ奏レ給フハ  
豐葦原乃水穗

國波晝波如五月蠅水沸支夜波如火瓮光

神在利石根木立青水沫 事問天荒國在

利○豐ト美稱スル葦原瑞穂國即十大八洲國ハ晝間ハ五月頃ニ群出ル蠅似  
ス邪神ト云邪神ガ皆沸立テ騷動ギ夜中ハ瓮ノ中ニテ燒タルノ火如ク

光リ耀ク妖神アリ又巖石樹木青色水之沫ノ類迄モ其妖神邪  
鬼ニ煽動セツレテ音語ナドレテ甚タ暴亂之國ヲゴザリマス 然毛鎮

平天○皇御孫命爾安國止平久所知坐之米  
止

○神護云此詞之竟  
 大なる神等と擬平  
 たる事より大國  
 主神を擬叙めた  
 る方全文に互り  
 て其用重きが故  
 に天夷鳥命爾布  
 都怒志命乎副天  
 と續けたるにて  
 出雲國造が己か  
 祖神たるをもて  
 私し他神を祀た  
 るには非る也情  
 こ、に布都怒志  
 命と有は他神置  
 命を擧げるにて  
 云々

○同云乎毛の詞は  
 竟ふる國神を言  
 向に天降し給ふ  
 事の因に此大神  
 をも擬叙めて此  
 國を事避奉らし  
 め玉ふ也云々  
 ○後釋云現事は云  
 々々國事は云々ど  
 副べし同意なる  
 事を如此様に二  
 つ重ねて云は古  
 文なり  
 ○同云靜坐車云  
 々々、の文は皇  
 御孫命波大倭國  
 爾靜坐車止申天  
 と有るべきを聊  
 詞のいひざま違  
 へり云々故思ふ  
 に大名持命の附

申 氏 ○然ヤウニハゴザレドモソノ騷動ヲ謚メ平定テ皇御孫尊  
 ニ平穩ナル安國ト平ヲカニ治領坐サセント奏シテ  
 己命

兒 天夷鳥命 爾布都奴志命 乎副 天天降

遣 天 ○天穗日命ガ己命即御自分様ノ御子ノ天之部照ノ名義ト云フ天夷  
 鳥命ニ布都怒志命ヲ副ヘ並ベテ鎮撫ト征定ノ爲メニ高天原ヨリ

葦原中國ヘ天荒布留神等 乎撥平氣 國作之 大神  
 降レ遣ハシテ

乎毛 媚鎖 天 ○オホヤシヒノミツツシメテハコトコトヤラシメヤ  
 大八島國現事顯事令事避 支

國中ニ暴ヒ立タル邪神トモテ遺穢ヒ退治レ平ヲケ國土ヲ經營ナサレタ大神  
 即ナ大名持神ヲモ依リ親ミテ御心ニ逆ヲハズヨキニアヒレラヒツメ媚鎖メ

大神ノ主頭シタリシ大八洲國ト大脚ノ主宰シタリシ天下現世ノ諸政事  
 即現事トモ顯事トモ云塊界ノ事務トチ皇御孫命ヘ事避リ讓リ奉ラセケリ

乃 大穴持命 乃 申給 久 皇御孫命 乃 靜坐

大倭國 申 天 ○乃ソコデア大名持命ガ申シ給フハ皇御孫命ガ往  
 ク先ニ大官造リテ鎮マリ坐サントスル大倭國

己 命和魂 乎八咫鏡 爾 取託 天 ○倭

大物主櫛 應玉命 登名 乎稱 天 ○大御和 乃神

奈 備 爾 坐 ○己命御自分様ノ利魂ヲ八咫鏡ト云御鏡ニ取託ト憑依附  
 託テ御靈代トシテ御自大倭之大物主奇大魂之御事ノ義

よは叶されども  
此之後に國道の  
倭の京に参りて  
其倭よて奏す詞  
なれば云々此大  
倭國を皇御孫命  
の靜坐し大倭國  
と申てといふ意  
なり  
○神名式云大和國  
城上郡大神大物  
主神社  
○神名式云神奈備は  
神並の禰也云々  
山にもあれ社に  
もあれ神の鎮坐  
所には其支神も  
共に侍ひ坐す故  
に然云りと聞ゆ  
云々

○神名式云大和國  
葛上郡高鴨阿治  
須岐託彦根神社  
四座  
○同云高市郡高市  
御縣坐鴨事代主  
神社  
葛上郡鴨都美波  
八重事代主命神  
社二座  
○神名式云出雲風土  
記に多伎鄉所建  
天下大神之御子  
阿陀加夜努志多  
岐比賣命坐之故  
云多岐云々と  
何神ならむと索  
隱るに決く下照  
姬命に坐り云々  
○零解云此説ま  
どふ事也云

ナル御名ヲ殊更ニ此ノ靈似リニ美稱ヲ大和  
國城上郡ナル大三輪ノ神奈備山ニ坐サシメ  
已命乃御子阿遲

須伎高孫根乃命乃御魂乎葛木乃鴨能神

奈備爾坐  
○御自分様ノ御子ノ味紐高彦根命ノ御魂ヲ大和國葛上郡  
葛木山ノ東南ノ麓ノ高鴨ト云フ神奈備ニ坐マサセ

事代主命能御魂乎宇奈提爾坐  
○事代主命ノ靈  
ヲ大和國高市

郡ナル宇奈提ノ賀夜奈流美命乃御魂乎飛鳥乃  
地ニ坐マサシメ

神奈備爾坐  
天  
○下照姬命ナラント云考アル賀夜奈流美命ノ御魂  
ヲ大和國高市郡ナル飛鳥ノ神奈備ニ坐マサセテ

皇孫命能近守神登貢置天八百丹杵築

宮爾靜坐支  
○皇御孫命ノ皇城ノ近守神ニト上ニ云ル如ク己命ノ和  
魂以下御子三神ノ靈ヲ大和國內ニソレソレニ鎮ラセ

皇御孫命ニ奉テ置テサテ御自身ノ御本靈ハ八百土ト多クノ土ヲ  
杵ニテ鎮クト云フ義ナル出雲國ノ杵築ノ大社ニ鎮マリ坐マシケリ

親神魯伎神魯美乃命宣  
○是時ニ親神之男君脚  
之女君之御事即高皇

產靈神皇產靈尊  
汝天穗比命波天皇命能大御世  
ノ宣リ給フハ

乎堅磐爾常磐爾伊波比奉伊賀志乃御世

々和州五郡神社  
 畧解にかの加夜  
 奈留美命神社を  
 載せて社家者説  
 曰茅嶋身神社高  
 照姫命と云り云  
 を然らば此飛鳥  
 神社とも此神  
 を主と祭りけむ  
 を後に大己貴神  
 高彦根神事代主  
 神をも合せ祭り  
 遂には事代主神  
 を主とする事に  
 はなりしなるべ  
 し云々  
 ○神名式云高市郡  
 飛鳥神社四座

○講義云大國主神  
 國去の時に其禮  
 實の物を天種日  
 命に託て云々穂  
 日命の復奏し玉  
 ひし時に天津朝  
 庭に登奉りし例  
 に擬ひて云々熊  
 野杵築云々大神  
 等に奉れる神寶  
 を申下て大神の  
 禮實として獻る  
 を以て云ふなり  
 ○臨時祭式云玉六  
 十八枚 赤水精八  
 十六枚 青石 金銀  
 玉四十四枚 長二  
 裝太刀一口 尺六  
 寸五 鏡一面 徑七  
 分 倭文二端 各一  
 丈四

爾 佐伎波閉奉 登 仰賜 志 次 乃 隨 爾 供齋

汝天穗比命ハ大名持神ノ祭祀ヲ爲シツム皇之御命即天子ノ足バノ大御世  
 ナ堅磐ノ如ク常磐ノ如クニ守護ヒ奉リ茂大之御世ニ幸ハ奉レト神魯伎

神魯天ガソノ事ヲ穂比命ニ請ケ持タセ負セナサレタ  
 其穂比命ノ後ヲ繼々ニ續ク次ノ隨ニ定例ノ齋事ヲ△  
 (若 後 齋 時

者 加 後 字 仕 奉 氏 式  
 ハクハツノナノモツチ モシ初度ノ齋ノ神魯ナラテ後ノ齋ノ  
 神魯ノ時ハ後供齋ト後ノ字ヲ加フ

朝 日 乃 豐 榮 登 爾 神 乃 禮 自 利 臣 能  
 ノ如ク仕 アサヒヒ ノ トロサカノホリニ  
 マツリテ

禮 自 登 旭ノ豐榮上ノ時刻ニ出雲國造ガ志都宮ニ鎮メ祭レル兩大神  
 ニ奉リン神寶ヲ更ニ申下シテソレテ神之禮實ト稱ヘ又穂比

命ヨリ以來捧ケ來レ 御 禱 乃 神 寶 獻 止 良 久 奏 天子ノ大御  
 ル臣之禮代ト申シテ

白 玉 能 大 御 白 髮 坐 此ノ獻ツル白玉ノ如ク  
 ル御禱之神寶ヲ 獻上スト奏ス 御白髮ノ生マサンマデ

赤 玉 能 御 阿 加 良 毘 坐 此ノ獻ル赤玉ノ如ク  
 御壽命長ク マシマシ 御顏色サルハシクア

青 玉 能 水 江 玉 乃 行 相 爾 明 御 神 登 大  
 カラシマシ

八 島 國 所 知 食 天 皇 命 能 手 長 大 御 世 乎  
 ヤシマシクニ

御 橫 刀 廣 爾 誅 堅 米 此ノ獻ル青石玉ノミヅムレク美シキ  
 ハカシノヒロクニウツナガメ

尺廣二尺二、白眼寸並置、紫、鶴毛馬一匹、白鶴、二聖、新御覽五十、昇、昇別盛、十、健、

行合テ能ク調ヘタルガ如クニ現之神ト坐マシテ大八洲國土ヲ調ヘ治シメ、ス皇之御事即天子様ノ足長ノ大御壽ヲ此ノ太刀ノ幅ノ廣ラナル如クニ大

御壽廣ク又太刀ヲ鍛ヒ堅メレ如ク大御身ヲ堅、固ニ堅メ保タセオハレマセト此太刀ヲ獻リ、**白御馬能前足**

**爪後足爪踏立事**波。大宮能内外御門柱

乎上津石根爾踏堅米下津石根爾踏凝之。

白御馬即ナ標記ニアル獻上ノ緒白馬ガ前足後足ノ爪ニテ踏立テ行ク事ハ、大宮ノ内重外重ノ御門ノ柱ノ根ナル地ヲ上之磐石下之磐石ト地上ヨリ地

底マデ堅固ニ**振立流事**波。耳能彌高爾天下乎所知、踏テ凝固ラセ

**食** 左 幸 事 志 太 米。其馬ガ耳ヲフリ立ツル事ハ其耳ノ高キガ、如ク彌高ニ益隆盛ニ天下ヲ知レ食サン事

ノ下見前表ト**白鶴**乃生御調能玩物登倭文能大、此馬ヲ獻ツリ

**御心** 毛 多 親 爾。白鶴即ナク、又俗ニ白鳥ト云フ鳥ノ生キタ、ル御調物ノ愛玩物ノ鳥ノ色ノ白ク明ラカナル

ヤウニ又管文即ナ筋織ノ布ノ筋ノハ、彼方能古川岸此方、ツキリレタルヤウニ大御心ニ

古川岸爾生立若水沼間能彌若叡爾御若

**叡坐**。古川ノ彼方此方ノ岸ニ生立榮在若栗林、須須伎振遠止、ノ如ク彌若ヤギニ御若ヤギマレム

○後釋云志太米と下見之にてうの下形の圖はれ見えたるといふ云々  
○後釋云此馬と獸ることと本本號別會の古事に使てとて或人のいへるさる事と云々  
○釋云生御調は生なから来る也云々式に御覽五十拜とあるられに別たし爲に生御調とは云ふ也云々  
○後釋云古川の彼方此方の岸といふ事なるを云々に

古川と二にわけ  
て云るなり

○同云此水相國  
と、心得ず云々  
故思ふと若は時  
久留置なりけし  
と云々如此云故  
之語の續き古事  
記の雄略天皇の  
大御歌に比氣多  
能和加久流瀧  
其和加久開附と  
讀せ給へる例有  
倍賦る御費の中  
に取も有に付て  
の或詞ならしむ  
と思へとなり取  
柄と源林也云々  
○同云須々伎媛は  
云々出雲風土記  
なる仁多郡三津

の水は神代にり  
でたき由縁ある  
水なる故に國造  
の此齋にも用ひ  
初る事なれば御  
費五十昇の内は  
も此水を雜へて  
献るなるべし云  
々  
○同云乎知とは何  
にされ初の方へ  
歸るをいふ首に  
て老たる人の若  
かへるをも云り  
云々  
○讀義云上に親神  
魯伎神魯美命宜  
久天穂日命波云  
々止仰賜志次乃  
隨と見えたる如  
く其天穂日命の  
天朝廷へ返事  
申上給ける時更  
々天神の宣ひ附  
させ給へりし事  
物有るを依て其  
子天與島命の高

美乃水乃彌乎知爾御衰知坐

○物ヲ滌ギ振搖レバソノ  
物ニ解レテ暫時流レノ

淀々淀々水ノ如ク益ヲナ返リニテナカヘリテ老給  
フ御斷モ本ノ若キ方ヘ御ヲナカヘリツム御出マレ

麻蘇比乃大

御鏡乃面乎意志波留志天見行事能己

登久明御神能大八島國乎天地月日等共

爾安久平久知行事能志太米止○此ノ獻ツ  
ル其澄之

大御鏡ノ面ヲ押開ト晴レヤカニオレ開イテ明ヲカニ御覽ス事ノ如ク明ヲ  
カニ現之御脚即天子孫ガ大八洲國ヲ天地日月ト察ナク長久ニ安ラカニ平

ヲカニ知レ食サン 御禱神寶乎擎持 氏ノ神禮自利  
事ノ下見前兆ゾト

臣禮自登恐彌恐彌毛天津次能神賀吉

詞白賜久登奏 ○其ノ物ニ寄セテ大御世ヲ壽祝ギ奉ルベキ神  
寶ヲ上ノ如ク捧ゲ持テ神等ヨリノ禮代已レ

出雲國造即々臣ヨリテ體實ト長ユマリ恐ユマリツム天穂比命ガ高天原ニ  
テ神魯伎神魯美ノ命ヲ受ケ給ヒレヨリ其子孫相繼テ仕奉ル天之次ノ隨ニ

如此神祝之吉爾ヲ申  
上マスト奏レマヌ

千禧宮に参向け  
ひより其裔の出  
雲臣等世々は奉  
を以てぞ天津次  
とば云なりける  
然れば此詞も固  
り其時に成たる  
物にて人世上の  
に非る事上に注  
る如きは其時々  
の如きは其時々  
れ小異あるべけ  
有つらめども其  
大旨の易れるな  
らねば甚尊き文  
なりかし  
○按に壽詞は神  
むかひて白す詞  
にあらす天皇に  
對奉りて奏す詞  
なれば他の祝詞  
とて文体の甚く  
殊なるものなり  
しや思ひて其  
意を解るべし

○按に此附録の中  
臣壽詞は宇治編  
白願長公の台記  
別記に載せられ  
たるを本居翁の  
玉勝間に引出て  
稱美せられしが  
始に祝詞式の事  
附録にもする事  
とはなりし也  
○講義云文には天  
神の壽詞とて又  
略ては唯に壽詞  
とのみも云り此  
を中臣壽詞と云  
て其題號の如く  
なるを人も然思  
へる之高千穂の  
皇大宮に初國所  
知食皇御孫命の  
大嘗の大政を行  
はせ給ふ時に云  
々中臣上祖天兒  
屋命よと次々相  
傳へて天神の壽  
詞を稱申せりし  
かば其中臣の氏  
人の奏す壽詞と  
いふ意味なりさ  
て此を天神壽詞

附録

○中臣壽詞

御即位大嘗會ノ豐明節會ニ方リテ神祇官ノ  
中臣氏ガ上祖天兒屋命以來奉仕ノ嘉例ニ從

ヒ天神ノ勅語ニ基ツキ神代ノ  
故事ニ因リテ祝壽キ奉ル吉詞

現御神止大八島國所知食須大倭根子天

皇我御前仁顯之御神即世間ニ現ニ顯ハレテ坐マス神ト御出マ  
レテ大八洲國土ヲ知レ食ス大倭根子ト尊稱レ奉ル

皇之即天皇天神乃壽詞遠稱辭定奉止良久申須○本  
ノ御前ニ



としもいふ事は  
皇祖天神の大御  
命を受傳へ奏す  
由なる事云も更  
なるが云々

○神祇令云凡藤  
之日中臣奏天神  
之壽詞、儀以三神  
代之古事、爲三萬  
壽之寶詞也

○持統紀云四年春  
正月戊寅朔云々

神祇伯中臣大島  
朝臣、饗天神壽詞  
云々皇太后天皇  
位云々

○同云五年十一月  
戊辰朔辛卯、大嘗  
神祇伯中臣朝臣  
大島饗天神壽詞

ニ舉タル如ク天之神ノ詔ヒレ吉嗣ヲ其レニ就タル故  
事ヲモ引合セテ正シクカクト稱賛辭ニ定メ奉ルト申

高天原爾神留坐 須皇親神漏岐神漏美 乃

命遠持天八百萬乃神等遠集 倍賜天 幽界ニ神

留ト尊ク留リ鎮テ御出マス天皇之親ナル男女神祖ノ御言ヲ  
以テ大數ヲ舉レバ八百万トアマタノ神々ヲ集ヘ遊バシテ 皇孫尊

波高天原仁事始天豐葦原乃瑞穗乃國遠

安國止平介久所知食天 天都日嗣乃天都

高御座仁御坐天 皇御孫尊ハ此ノ高天原ニレテ事業ノ基ヲ起  
始メテ豐ト美稱スベキ葦原瑞穗國ト其始

葦原ノ多カリシ稻ノ穂ノ瑞ト美タク出來ル國即大日本國ヲ太平靜謐ニテ  
心モ安キ安國ト平ヲカニ知レ食レテ天之日給ト天照大御神ノ御寄ナル天

之高御座ノ御座ニ大天都御膳 遠長御膳 乃遠御膳  
坐々ト御出マシテ

止千秋乃五百秋仁瑞穗 遠平介久安介久由

庭爾所知食止事依志奉氏 天降坐之後仁

大御神ノ御依ナル天之御膳ヲ長キ世マテ聞シ召ス御膳ノ遠キ代マテ聞シ  
召ス御膳ソト千秋之五百秋ト千万秋マテモ其御依ノミヅトムレキ美相穂

○按に天都御膳 遠  
の遠字を玉勝間  
には乃の誤なる  
べしといひ講義  
には遠にて宜し  
き由論へり玉勝  
間の説の方勝れ  
りといふゆゑも  
暫く本に據れり  
○神代紀云天照  
大神又勅曰以  
吾高天原所レ御  
庭之御亦當レ  
御ニ於吾見  
○按に依志奉氏の  
氏にて暫し詞を  
かりて心得べし  
自他の別を思ふ  
べき處なきは也

○按に所知食の知  
を玉膳間には聞  
なるべしといひ  
講義には全は御  
國を知食と御事  
を兼併て云りと  
いへり

○聖解云今按に天  
忍雲根命は天兒  
屋命の御子なる  
事藤原氏の系圖  
に見えり  
○玉膳間云天忍  
雲根命 遠 神漏  
岐神漏美命 乃前  
爾 受賜 里申 爾  
天 乃二上 爾 奉上  
天と語を次第し  
て見れば能く通  
ゆる也  
○史傳云二上は  
高峯の過り上れ  
る狀の二つに分  
りし故に食る山

名なれば云々天  
津御國にある山  
名なり云々  
○神宮雜例集引大  
同本記云天牟羅  
雲命 乎召紹久食  
國乃水波未熟竟  
水爾在介云々

ナ御膳ニ調ヘテ平ヲカニ安ヲカニ大嘗ノ齋場ニテソノ御政ヲ知シ食シ聞  
シ召セヨト神祖ヨリ皇孫ノ御身ニソノ御事ヲ寄セ附ケ依奉アサテ皇孫邇  
邇藝尊ノ御天降 **中臣乃遠都祖天兒屋根命皇御**  
リ遊バシタ後ニ

**孫尊乃御前仁奉仕** 氏 ○中臣氏ノ遠之祖タル天兒屋根命  
ガ皇御孫尊即邇邇藝命棟ノ御

前ニ侍ヒテ祭政ノ **天忍雲根神遠** 天乃二上仁奉  
事ニ供奉仕ツテ

**上氏神漏岐神漏美命乃前仁受給** 波里申

仁 **皇御孫尊乃御膳都水** 波宇都志國 乃水

**爾天都水** 遠加氏奉 奉止申世 止事教給 志仁

**依** 氏 ○ソノ御子天忍雲根命ヲ神ノ男君神ノ女君之御事ノ御前ニ皇孫ノ  
御膳之水ヲ受賜ハリノ事ヲ祈願ニ天上ノ二上トイフ地ニ皇孫ノ

水取ノ御使ニ奉アゲソレニ教ヘ給フヤウハ皇御孫命ノ御膳之水ハ顯國即  
葦原中國ノ水ニ天國ナル天之水ヲ交ヘ加ヘテ奉フント御願ヒ申セト言教

ナサレタ **天忍雲根神** 天乃浮雲仁 乘氏 天乃二  
ニ仍テ

**上仁上坐** 氏 **神漏岐神漏美命乃前仁申** 世

波 ○天忍雲根命乃父神ノ仰ヲ長リテ天空ノ浮雲ニ乘リテ天上ナル二上ト  
イフ處ニ昇リ御出ナサレテ神漏岐神漏美命ノ御前ニ其由ヲ祈請セバ

史傳云玉串は玉  
と飾り付るよと  
出たる名なるが  
玉を附ざるをも  
美稱て玉串と  
云へる今の玉串  
は此を刺立て五  
百箇の生出たる  
を思ふに一よは  
わらず云々數多  
くの玉串なるべ  
し  
○禮儀云儀式よト  
定御井所云々ト  
式に其井二處ト  
訖云々どあるな  
と此のト定して  
堀る御井之しも  
昔は此文の如く  
して求させ給け  
むと云々  
○玉勝間云神名張  
よ左京二條坐神  
二座、太昭命命  
神、神智命命と  
ある其智由あり  
げあり、此二神  
は大社の列にぶ  
に入たまさるる  
に相嘗祭に預り  
給ふと大嘗祭に

殊なる由縁有る  
神なるべし  
○史傳云夕日より  
朝日照に至る迄  
待なばと詔ふ也  
○禮儀云麻知は云  
々智は物を智  
々言なるが又的  
と云義に同じく  
太兆の事にし  
其兆を標的にし  
て其事をト合ふ  
故の名也云々  
○玉勝間云玉字は  
蒜字を誤れるな  
らむ蒜と畫の借  
字ならむ云々  
○史傳云此由都は  
五百箇と同語の  
由都ならで伊都  
の義にや云々今  
の玉串は野蕪な  
りし故に其れ物  
實となりて蘆の  
なりしにや云々  
○禮儀云蘆と常に  
之竹林と云事な  
れど此と決めて  
符なるべし云々  
○大嘗祭式云其年

天乃玉櫛遠事依奉氏○神漏岐神漏美命乃々天之玉串ヲ以  
其事ヲ皇孫へ寄奉リテ教へ仰セ

此玉櫛遠刺立氏○ニフヒヒ自夕日至朝日照万氏

天都詔戸乃太詔刀言遠以氏告○今事依レ授  
禮○今事依レ授此ノ玉

申ヲ持下リテサレベキ地ニ刺レ立テ夕日照ル時即薄暮ヨリ朝日照ル時  
即翌朝ノ平明ニ至ルマテ今教へ授クル天之祝詞ノ太ト尊クメテキ祝詞

如此告麻知波弱蒜仁由都五百箇

生出自其下天乃八井出○如此サヤウニ天之祝  
詞ヲ宣フハ井水ノ出

ル前兆即チ目處ニハ若靈即正午前ノ時刻ニマツ由都ト清ラカニ五百ト數  
多ノ竹藪ガ生ヒ出ルナラン即チ其篋ノ下ヨリ天之彌井ト多ク美水ノ漏出

ル井ガ出來此遠持天天都水止所聞食止事依

奉支○此遠即其水ヲ以テ此大上ナル天之水ゾ如此依奉志任

任仁所聞食由庭乃瑞穗○カヤウニ天津水ヲモ副へ  
テ天ツ神ノ寄サレ奉々通

リソノマムニ聞レ食レ召上ル大四國卜部等太兆乃卜事

遠持氏奉仕氏悠紀仁近江國野洲主基仁

令所司卜定悠紀  
主基國郡云々  
○請義云朝廷に仕  
奉る人を泛くモ  
ノノフと云式と  
齋場雜色人と云  
へる是也儀式に  
は卜定物部八十  
五人と正しく記  
されたり卜定田  
及雜式人等歌人  
不造酒見一人  
御酒波一人、籬粉  
一人、共作二人、多  
明酒波一人、并女  
稻實公一人、燒灰  
一人、探薪四人、歌  
人廿八、歌女廿八

丹波國氷上遠齋定

氏 ○伊豆壹伎對馬其他今一ヶ國ヨリ神  
祇官へ奉仕スルト部等ガ太ト尊ク

真似ト違ハヌ太兆ノト事ヲ以テトヘ仕ツテ齋清ノ義ナル悠紀ヲ仕ウ奉ル  
國ニハ京都ヨリ東ノ方ニアハ近江ノ國ノ野洲ノ郡次ノ義ト云ヒ齋清ノ義  
トモ云フ主基ヲ仕ウ奉ル國ニハ京都ヨリ西ノ方  
ニテハ丹波國ノ氷上ノ郡ヲト兆ニテ齋ヒ定メテ  
物部乃人等酒

造兒酒波粉走灰燒薪採相作稻實公等大

嘗會乃齋場仁持齋波利參來氏  
○物ノ部領ノ意ニテ  
即齋場雜色人等即

ナ黑白ノ御酒ヲ造ル長メル造酒童女ソノ助役ニテ酒嘗ノ義ナルベキ酒波  
女飾ヲ取テ藥灰ヲフルヒ酒ヲ漉シ又粟ノ穀米ノ糠ヲモフルヒ走ヲス粉走

女黑白二酒ニ混和フル藥灰ヲ燒ク灰燒男灰燒ナドニ入用ノ薪採男酒造兒  
酒波ヲ助ケテ御酒ヲ相造ル共作女御膳ニ仕奉ル稻實公男等大嘗官ノ齋庭

ニ持齋ト齋清マ  
リテ參入シテ  
今年十一月中都卯日仁由志理

伊都志理持恐美恐美母清麻波利仁奉

仕利○今年ノ十一月中之卯日ニ齋シリト齋マ  
清ノ持テ長マリ長マリ清マリニ清リテ仕奉リ  
月内仁日

時處撰定氏獻留悠紀主基乃黑木白木

乃大御酒  
○月ノ中ニモ吉日ノ吉時ヲ擇ビ足ノツト諸事ヲ供奉  
テ奉ル此ノ悠紀主基ノ黑酒白酒ノ大御酒ヲ○仙酒

○齋庭清云こは色  
の黒と白と云  
二種の酒を云  
々儀式に以藥灰  
和御酒五斗和內  
院白黒二酒五斗  
和大多米院白黒  
二酒云々儀式  
には齋庭白黒  
二酒料云々齋後  
以久佐木灰三升  
和合一壺是稱爲  
貴其一壺不和是

解白費であること  
かの儀式の黒白  
共に和すと異也  
云々

○按に講義には天  
津神乃壽詞遠稱  
辭定奉留までと  
上段の結びと見  
たれど熟考する  
にさて之文意通  
らず故今は皇神  
等母へ風けて解  
きつ

ナ音ヒア御饌  
モ自ラ隨レリ  
大倭根子天皇  
我天都御膳乃長御

膳乃遠御膳止汁仁毛實仁毛赤丹乃穗仁毛

所聞食氏豐明仁明御坐氏  
○大倭根子ト尊稱レ奉ル天  
皇之天之御膳ノ長御膳ト

長キ代ニ召上ル御膳ノ遠御膳ト遠キ代マテ召上ル御膳ト遊ハレテ酒汁即  
黒白ノ御酒ニテ相買即御飯ニテ赤丹ノ發色ト申スロウニ聞食レテ御

顔ノ御色ウルハレク豊天都神乃壽詞遠稱辭定奉留  
之光澤ニ赤リ遊ハレテ

皇神等母。千秋五百秋乃相嘗仁相宇豆乃

比奉利堅磐常磐仁齋奉利氏伊賀志御世

仁榮志米奉利  
○神魯伎神魯美ノ皇孫ヘ事依遊バサレ上ニ音ヘ  
ル壽詞ノ末遊ハヌヤウニ守護リ奉テ自ラ壽詞ヲ

定メ奉ル功德ノ坐マス皇神等即大嘗祭ニ祭ラセラルム伊勢大神宮ヲ始メ  
天社國社ノ神等モ天皇ノ千秋万秋マデ聞レ召ス大嘗ノ御相伴タル相嘗ニ

彼瑞穂ノ御酒御饌ヲ聞食テ相宇豆乃比ト此事ヲ受納シ承諾レ奉テ天子様  
ノ御身ヲ堅磐ノ如クニ常磐ノ如クニ齋ヒ奉リ茂大之御壽ニ榮エシメ奉リ

自康治元年始氏與天地日月共照志明良

志御坐事仁本末不傾茂槍乃中執持氏奉

○講義云延喜書覽  
中臣本系帳に高  
天原初而皇神之  
御中皇御孫之御  
中執持伊賀志辨  
不傾本末中其布  
留人稱之中臣者  
○同云鎌足公傳に  
其先出自天兒屋  
命世尊天地之祭  
相和人神仍命其  
氏曰中臣

○同云清親之二所  
大神宮例文祭主  
次第に右大臣正  
二位神祇伯大中  
臣清麻呂公の末  
孫祭主永頼の末  
孫神祇大副清  
の一男にて保延  
四年十二月廿九  
日神祇大副に任  
たる由見えたる  
此人なり

仕留中臣祭主正四位上行神祇大副

大中臣朝臣清親壽詞遠稱辭定奉久止申

今上近衛天皇様ガ此ノ康治元年ヨリ始リテ天地日月ト共ニ永ク遠ク豊ノ  
明ニ彼ノ瑞穂ヲ聞レ食レツト美レキ御面ノ光澤ニ物ヲ照ラシ明ラシ給フ  
如クニ天下トテ照臨シテ御出遊バサントスル其御事ニ本末傾カセズ嚴大鉞  
ヲ持ツニ其柄ノ中間ヲ執ル如ク本トマス神ト末トマス皇孫トノ御中間ノ  
御事ヲ双方全ク宜キヤウニ執リ持テ引キ請ケテ仕ウマツル中臣即チ中執  
臣ノ意ノ職分ニテ大嘗祭ノ齋主タル從四位上ノ位ニテ相當ノ官位ハ從五  
位ニエ行トイフ神祇大副ノ官ノ氏ハ大中臣姓ハ朝臣名ハ清親天祖神勅ノ  
壽詞ニ懺カニ神代ノ故事ヲ合セテ稱贊辭ヲ定メ奉ルト白ス○以上天皇ヘ

奏ス壽  
詞ナリ

又申久 天皇朝廷 仁 奉仕 留 親王等 王等

諸臣百官人等 天下四方國 乃 百姓諸諸

集 侍 氏。又詞ヲ改テ白ス天皇之朝廷ニ仕ウマツリテ此ノ大嘗祭ニ  
預リ奉リ聲明ノ御宴ヲ給ハル親王タナ王タナ公卿タナ百

官人タナ天下中ノ百姓諸之語之此ノ御宴ノ 見食 倍 尊食 倍 歡  
御坐ニウゴメキ列ナリ畏マリ侍リ坐シテ

食 倍 聞食 倍。天皇朝廷 仁 茂世 仁 八桑枝 乃

○講義云小齋大齋  
の親王以下百官  
人々の宴を賜は  
る限を云へり  
○同云別も百姓を  
宴に召るゝにて  
は無れども悠紀  
主基に仕奉る國  
郡司以下雜色人  
と更なり常に  
國々より在京し  
て仕奉る官人及  
諸司の下司にも  
召されて仕奉る  
百姓をも合せて  
廣くいへる也云  
々  
○同云食 倍と給へ



是は初はみひ乃人はあ見みは船をも梯にもまてあみあ  
 はあはなれば、學をも徒は、おれりてこれを攀も流る。舟艦  
 乃いたてまらまる極馬乃爪乃心たて留るるあはみあを  
 心は遠き仇かひみあまいたたてまらといふは讀岐國琴  
 平山神官合議所理事上里 濟

祝詞解追考

○今の世にして、古語の意を知らむとするに之、其語に正しく書れ  
 らむ漢字を探て、引合せみるを便よしとす。此註解中に、  
 君神<sup>ミカミ</sup>之<sup>ノ</sup>女<sup>メ</sup>君<sup>ミ</sup>ノ<sup>ハ</sup>ハ<sup>ハ</sup>極<sup>マ</sup>りて<sup>テ</sup>其<sup>ノ</sup>奉<sup>ル</sup>り<sup>物</sup>を<sup>指</sup>す<sup>所</sup>なり<sup>ナ</sup>、  
 其のこゝろにてせしむさ也、例なき事なりとて替むへからず、こ  
 は凡例にいふへきことなりしを洩らしたれば、こゝにいふなり、  
 ○新年祭儀中をばしり、其の外々にも、幣帛を充座と譯しつるは、古  
 人の説なれど、よく思へば書れりともたはえす、充はさもあるへ  
 けれど、ハハ極りて其の奉り物を指す所なり、なほ△大祝詞の  
 千座<sup>チサ</sup>座<sup>ザ</sup>の所の抽案をみるへし、

○座<sup>ザ</sup>座<sup>ザ</sup>を井<sup>イ</sup>之<sup>ノ</sup>後<sup>ノ</sup>の意といふと考の脱にて、いかにもしかるへく聞  
 え井<sup>イ</sup>之<sup>ノ</sup>塘<sup>トウ</sup>かといふと講義の脱にて、それも捨かたく聞ゆるを、今  
 一ついは、居處<sup>イヂ</sup>領<sup>リョウ</sup>の義にもあらむか、然いふ故は古語拾遺に坐  
 座<sup>ザ</sup>は大宮地之靈也とありて、宮所を宮居<sup>ミヤイ</sup>といふ例もあればなり、



されどこと試にいへるなり必か、はる事なかれ、

○新年祭條の辭別伊勢 爾坐天照大御神 能大前 爾白久、皇神 能見 辭志坐云々の一段を、前段生島の條に附たる辭別にて、皇神とは生島神を指せるならむとて、解にも標注にも其事をいひしかど、またよく思へば、此の辭別といふは、前條すへてに對せる辭別にて、生島の一條に對せるにはわらす、末段の辭別忌部願肩云々の詞別と同格なりけり、さて何故に伊勢の祝詞の上にかく辭別といへるならむといふかしらに、先かの新年祭の祝詞の順序を見るに、第一には新年班幣諸社を取すへたる祝詞、第二には新年に第一の主たる御年禮の祝詞、其次に之天皇の宮中に盛奉る神等、即八神座座御門生島の祝詞をつらねたり、されどこれに續けて、最も尊き大御神への祝詞を宣るに、殊に詞を改むべきことなれば、辭別の語を冠せたるものなるへし、若し今の考のかた當れりどせば、かの皇神とあるは、必皇大御神と申すへき處なるを、前の條々にすへて皇神といへるよりうづりて誤れる物とすへし、

○新年祭の忌部 能願肩 爾太多須支取桂 氏持由麻波利とあるをばしめ、其外々に持齋とあるを、十分一齋清リテといふ意に譯しつるは、この持は行ふ事をトリ行フといひ、見る事をウツ見ルカヤ見ルなどいふ例に、其事のらみに附けいふ詞と聞ゆればなり、大神宮九月神嘗祭祝詞、忌部願肩 爾太櫛取懸持 齋波里 令捧持 氏なども、上の持齋の持を手に持こと、すれば、下の捧持の持と重復して、詞れど、のへ宜しからず、また持齋の持もし正しく手と持つことならば、齋持とこそいふへけれ、持齋とはいふへわらすなむ、

○春日祭の神主 爾某官位姓名 乎定 氏獻 流宇豆 乃大幣肩 乎とある神主を、講義に儀式に早且神祇官人率神主神琴師神都卜都向社云々、また次神主著木綿盤就祝詞坐とあるを引きての說あるに、よりて、それを取りて解を下しつれど、再ひそこの文勢を思ふに、祝詞に神主といへるは、神祇官より祭事掛りの物領として遣はさる、人を指せるにて、儀式に神主といへるとは殊なるへく聞

えたり、されは強にかの解にと拘るへからず、

○同條の伊賀志夜久波敷を、講義の説によりて五十種八葉枝と聞しつれど、穩ならず思ひなりぬ、大之彌桑枝と見るへし、大と彌と重なれるも妨なかるへし、

○廣瀬祭の御膳持須、流を、須を世の誤とせむか、流を衍とせむかといふこと容易定め難し、されは須は世の普通として、本のままにて解きて宜しとすへし、

○同條末段に、倭國 能 六御縣 乃 山口坐皇神等前 爾母とあるを、講義に四時祭式に是日以御縣六座山口十四座合祭といへるによりて、六御縣 乃 字は及の誤かといひしは、精しきに似て精しからず、此日の山口祭は六の御縣ある郡々の山口のみにもあらず、吉野郡の吉野山口神社と、平群郡の伊駒山口神社など、御縣なき郡の山口神社へも幣帛を奉られて、此段は其山口より下し給ふ水を、御縣の地へ甘き水と受ることを主意にして、山口神へのみ白す詞なるゆゑ、六御縣 乃 山口坐皇神等といへるなり、六御縣に

坐す神社は、大忌祭の本主とます若宇加賣命の分靈にますへければ、此祭に幣帛奉らるゝ事は勿論なれど、此處の詞は御縣坐神社へ白す趣にはあらざるなり、

○大祓詞の初に、諸聞食 止宜といふ詞二つありて、此の宜とある處にては、人々必ず唯と稱を例なれば、二所ともに唯といふにやと考ふるに、前の集侍云々の方の宜といふにのみ唯といひて、天皇朝廷 爾云々の方の宜には唯とは稱さぬなるへし、そは次の詞はた、古文を存せるものにて、既に集侍云々の宜ある時は後の宜は當時の式には關からぬ宜なればなり、

○天之八重雲 乎 伊頭 乃 千別 爾 千別 氏 乃 千は、若くはナハヤツルなどのナ、即稜威と同意の詞にて、稜威之稜威排にもわらむか、しか見れば上の八重雲 乎の乎もじも、別の一語にかゝりてよく聞え、又次なる天之八重雲 乎 伊頭 乃 千別 爾 千別 氏 所聞食 奉の千別てふ語も、よく通ゆるこゝちす、

○同條の生剝逆剝の逆剝は、背より剝く事なり、生なから剝げは、兩

足をもちがきて、腹より順に剝く事は難きゆゑに、背より逆剝に剝しなり。さて此事を古事記には天照大御神坐忌服屋而令織神衣之時穿其服屋之頂逆剝天斑馬剝而所隨入時云々と記されて、素戔嗚尊の御行事の上にて申せは、皮を逆剝にしたまひしよりは、忌服屋へ其馬を隨し入れたまひし方を、甚重き御罪なりしを、この詞には其御罪の初の生剝逆剝を罪名に立て、かの御暴行の事をも含めたるなるへし。

○同文の天津祝詞 乃太祝詞事 乎宜禮の禮は、尋常の令言にて強ていふかしみ思ふへき詞にはあらざるなり、さてそは雖より難へ合するならむといふに、此處の一小段は、すへて汎く合することにて、段の初に天津宮事以 大中大臣といへる大中大臣へ、朝廷より令する趣なりされは、大中大臣といふ語にも、自ら呼出すこと、ろをふくめりよく一小段にわたりて考みるへし。

○遷却崇神祭に、馳出物 止御馬といへる詞いとたくみなり、此祝詞は皇御孫命の天御舍の内にます崇神を、山川の清き所へ遷幸せ

と申すなれば、馬を奉るも實は、その遷幸の料に供ふる下心なるへきを、それとなくかくれたもしろくいひなせりと聞えたり。

○出雲國造壽詞の高天能神王の神王を、しはらく正副に従ひてカ  
アロと訓みつれど、ねはつかなし、古訓のカムロオヤもどより釋  
にて宜しく、又考の如くカムロギと訓まじもあしからじ、カムロ  
ギは高御魂一柱にかゝる稱にて、神魂にはかゝらねばいかゝ、な  
るやうなれどしからず、高御魂神魂は、二柱にて一柱の如くもま  
します事、記傳にもいへるか如くなれば、カムロギを高御魂一柱  
にかけて申せは、そのひいさばれのづから神魂へもかゝるなり、  
しかのみならず、此處の書法は、高天能神王高御魂神魂命とあ  
りて、高御魂の下にも既に命の尊稱を省きて、二神を一神の如く  
つ、けて、神魂の下に命を置たれば、カムロギの尊稱を高御魂の  
上に冠らせ、カムロギを省きてその語をど、のふるも、もとより  
さるへきこと、聞えたり。

○同文中の神奈備を、講義に出雲風土記の神名槌山有石神高一丈

周一丈許側有小石神百餘計を引きて、神並の義といへるは、めつ  
らかなる考なれど、今一つ試みいは、神之身の意か、カミナヒのミと通  
ふは常多きことなれば例を擧るに及ばず、さてかくいふゆゑは、  
山にもあれ森にもあれ、神靈の鎮坐すへき地は、その神靈の身體  
に似たる物なるゆゑの名ならむと思はる、うへたのれ事比羅  
宮のある番物のうちにて、往古より山を以て神体とすといひ傳  
ふとありしを見て、これも縁ありと思ひつればなり、さて神奈備  
てふ詞は、全くは神奈備山とが神奈備の森とかいふへきを、た、  
カミナヒとどのみもいふは畧言なるへし、

○中臣壽詞の如此告波麻知波弱蒜仁は、いと心得難き語なること  
は誰もいふ如くなれば、た、古人の説に従ふへきなかに史傳の  
待者の説は聊かいふかし、そは如此告波の波と麻知波の波と重  
なれるも語勢いか、又マツバとあるへきマのナなるも、ちはぬ  
の草体より誤りしならむなどいひ、いふへけれど、猶いか、  
なり、故今この解には講義の説に又的といふ體にてとあるを取

りて、字を目處に改めて解さつ、

○由志利伊都志理持恐美の志理と、カミリシマリハマリなどのマ  
いと同しく活語にて、其事よ心をす、めてものするさまをいふ  
詞持は前にもいへる如く、語の上よろへいふマにて、恐美恐美  
に附けるなるへし、されは講義の説に、カミの意といひ、また持を  
手に取り持つことにいへるは當らすやあらむ、

○延喜式祝詞詠解正誤

上卷

○一丁。等の符前に有るに。後に有りて前を受るを。とす入りのしを上中の卷中に此別を立  
さりしはわろかりさされは前に有て後へかゝる符はすへてアイウエオ等の字を符の下へ置  
かへて見るへし

○一丁。班幣は班幣○二丁。花。ヤカは華ヤカ○三丁。稱鮮蒐奉卒の下に「を脱○五丁。其柱ノ  
太キガ如ク御代知食は其宮ヲ知食○六丁。治ヲ其御殿ヲ治テ○六丁。標此奉齋ノ奉齋○八  
丁。伏セテ有ルと伏セテ有リ○九丁。馬ヲ立テと馬ヲ立テ○同。平開着の下に「を脱○十丁。  
十は十○十一丁。御始は御治○十二丁。標此見多は見え○十四丁。朝地は朝廷標配の見多は見  
え○十五丁。横ハレルと横ヲハレル○十六丁。常石は常石關係ヲは關係ヲ標配の仕奉。爾依  
下の字脱○同。大原野杖岡等脱此此の大の上此の下に「を脱○十七丁。亦曰編は亦曰編

○十八丁。柔は柔剛は剛○同丁。白賜。郎止。宜の下を脱○十九丁。標此あるとはあれ○廿丁。  
十市は十市奉は奉○同丁。汝方は汝方様○廿一丁。倭國は倭國○同丁。龍出風神祭の  
下に廣瀬祭ト同時即四月ト七月ニ診風ヲ吹セヌヲ五穀成就セム給ヘト断ル祭の解を脱

○廿三丁。申出。のシは衍○同丁。令遇台遇の合は分誤○廿四丁。奉納セマは奉納セマヤワラ  
カとヤハテカ標記にはてのはは衍○廿六丁。スヘ立とスエ立。剛イは剛イ○廿七丁。高クヌ  
ヘハ高クヌエ○廿八丁。天子樹。りの下に奉ラ。の四字を脱○卅丁。横ハレル。横ヲハレル

○三十一丁。平平野の平一字衍

中卷

○三丁。登。と登。○同丁。率。と率。○四丁。天津日嗣乎の。は。瑞穂之國乎の。は。○同丁。  
按に云々衍○五丁。奥ノは奥○同丁。標記を。と共に云々の上に「按む御殿乎の乎。ハ次の一小段  
を隔て、其段末にあるへ」の廿五字脱。又皇神祭は皇神條○七丁。二靈。は二靈ノ○八丁。柔  
肩ハ弱肩○同丁。大直靈と大直靈○十丁。口令合結。と口令合給同標記岩間の下。戸を脱○十

一丁。法と法○十三丁。標記犯字を字のま。に出しつは犯字ニ同訓ヲ施しつ○同丁。暴動ビと  
暴動ビ○十五丁。國中。之國中。起。と起。○同丁。犯セルと犯セル○十六丁。座置之座置○置  
座之座置○十七丁。天下中。と天下中。○十八丁。不在止。○二十丁。標記謂之史之謂之史○同

丁。二十八宿。之シウ炎帝。と赤帝○標記災害。と災咎○廿三丁。ウ耻。と耻。○廿四丁。生置。と生置  
氏。剛は剛○同丁。皇御孫命の皇の字に。の符を脱○廿七丁。柔。と柔剛。剛。○廿八丁。官員等は  
官員等○班幣。と班幣○標記下。卯。と丁卯。○同丁。神。と神○鎮仕。は鎮仕。○三十丁。ヤワキ。とヤハ

キ○三十一丁。標記緒等。と緒等○三十二丁。幣物。と幣物○同丁。詞祝。と祝詞

○目次内親は内親王○二丁。進給布の進字に。の符を脱○三丁。織。ル布。は布○四丁。標記皇  
大神。と皇大神宮○五丁。國中。は國中。○同丁。標記大御酒の事。なり。は大御酒の事あり○七丁。標

下卷

○目次内親は内親王○二丁。進給布の進字に。の符を脱○三丁。織。ル布。は布○四丁。標記皇  
大神。と皇大神宮○五丁。國中。は國中。○同丁。標記大御酒の事。なり。は大御酒の事あり○七丁。標

○延喜式祝詞疏解正誤

上卷

○ニの符前に有るに<sup>ニ</sup>後に有りて前と受るを<sup>ニ</sup>とすへありしと上中の番中に此別と立  
たりしはわろかりきされは前に有て後へかゝる符はすへてアイウエオ等の字を<sup>ニ</sup>符の下へ置  
かへて見るへし

○一丁<sup>ニ</sup>班帯は班帯○二丁<sup>ニ</sup>花<sup>ニ</sup>ヤカは華<sup>ニ</sup>ヤカ○三丁<sup>ニ</sup>稱解<sup>ニ</sup>寛<sup>ニ</sup>奉<sup>ニ</sup>年<sup>ニ</sup>の下に<sup>ニ</sup>を脱<sup>ニ</sup>五丁<sup>ニ</sup>其柱ノ  
太キガ如ク御代知食は其宮ヲ知食○六丁<sup>ニ</sup>治<sup>ニ</sup>テ其御殿ヲ治<sup>ニ</sup>テ○六丁<sup>ニ</sup>標<sup>ニ</sup>奉<sup>ニ</sup>齊<sup>ニ</sup>と奉<sup>ニ</sup>齊○八  
丁<sup>ニ</sup>伏<sup>ニ</sup>セテ有<sup>ニ</sup>ルと伏<sup>ニ</sup>セテ有<sup>ニ</sup>リ○九丁<sup>ニ</sup>馬<sup>ニ</sup>ヲ立<sup>ニ</sup>テ馬<sup>ニ</sup>ヲ立<sup>ニ</sup>テ○同<sup>ニ</sup>平<sup>ニ</sup>開<sup>ニ</sup>着<sup>ニ</sup>の下に<sup>ニ</sup>を脱<sup>ニ</sup>十丁<sup>ニ</sup>  
十は十○十一丁<sup>ニ</sup>御始は御治○十二丁<sup>ニ</sup>標<sup>ニ</sup>見<sup>ニ</sup>名<sup>ニ</sup>は見<sup>ニ</sup>え○十四丁<sup>ニ</sup>朝<sup>ニ</sup>起<sup>ニ</sup>は朝廷標<sup>ニ</sup>配<sup>ニ</sup>の見<sup>ニ</sup>名<sup>ニ</sup>は見  
え○十五丁<sup>ニ</sup>横<sup>ニ</sup>ハ<sup>ニ</sup>レ<sup>ニ</sup>ルと横<sup>ニ</sup>ハ<sup>ニ</sup>レ<sup>ニ</sup>ル○十六丁<sup>ニ</sup>常<sup>ニ</sup>石<sup>ニ</sup>は常<sup>ニ</sup>石<sup>ニ</sup>、關係<sup>ニ</sup>ヲは關係<sup>ニ</sup>ヲ標<sup>ニ</sup>配<sup>ニ</sup>の仕<sup>ニ</sup>奉<sup>ニ</sup>備<sup>ニ</sup>依<sup>ニ</sup>氏  
の下の字脱<sup>ニ</sup>同<sup>ニ</sup>大<sup>ニ</sup>原<sup>ニ</sup>野<sup>ニ</sup>杖<sup>ニ</sup>同<sup>ニ</sup>等<sup>ニ</sup>祝<sup>ニ</sup>詞<sup>ニ</sup>准<sup>ニ</sup>此<sup>ニ</sup>の<sup>ニ</sup>大<sup>ニ</sup>の上<sup>ニ</sup>此<sup>ニ</sup>の下<sup>ニ</sup>に<sup>ニ</sup>を脱<sup>ニ</sup>十七丁<sup>ニ</sup>亦<sup>ニ</sup>曰<sup>ニ</sup>編<sup>ニ</sup>は亦<sup>ニ</sup>曰<sup>ニ</sup>編  
○十八丁<sup>ニ</sup>柔<sup>ニ</sup>は柔<sup>ニ</sup>剛<sup>ニ</sup>は剛<sup>ニ</sup>同<sup>ニ</sup>丁<sup>ニ</sup>白<sup>ニ</sup>賜<sup>ニ</sup>郵<sup>ニ</sup>止<sup>ニ</sup>宣<sup>ニ</sup>の下<sup>ニ</sup>を脱<sup>ニ</sup>十九丁<sup>ニ</sup>標<sup>ニ</sup>配<sup>ニ</sup>あるとはわれと○廿丁<sup>ニ</sup>  
十市は十市奉<sup>ニ</sup>は奉<sup>ニ</sup>同<sup>ニ</sup>丁<sup>ニ</sup>汝<sup>ニ</sup>方<sup>ニ</sup>は汝<sup>ニ</sup>方<sup>ニ</sup>様<sup>ニ</sup>○廿一丁<sup>ニ</sup>倭<sup>ニ</sup>國<sup>ニ</sup>は倭<sup>ニ</sup>國<sup>ニ</sup>同<sup>ニ</sup>丁<sup>ニ</sup>龍<sup>ニ</sup>田<sup>ニ</sup>風<sup>ニ</sup>神<sup>ニ</sup>祭<sup>ニ</sup>の  
下に廣<sup>ニ</sup>瀨<sup>ニ</sup>祭<sup>ニ</sup>ト<sup>ニ</sup>同<sup>ニ</sup>時<sup>ニ</sup>即<sup>ニ</sup>四<sup>ニ</sup>月<sup>ニ</sup>ト<sup>ニ</sup>七<sup>ニ</sup>月<sup>ニ</sup>ニ<sup>ニ</sup>診<sup>ニ</sup>風<sup>ニ</sup>ヲ吹<sup>ニ</sup>セ<sup>ニ</sup>シ<sup>ニ</sup>テ<sup>ニ</sup>五<sup>ニ</sup>穀<sup>ニ</sup>成<sup>ニ</sup>成<sup>ニ</sup>セ<sup>ニ</sup>メ<sup>ニ</sup>給<sup>ニ</sup>ヘ<sup>ニ</sup>ト<sup>ニ</sup>斷<sup>ニ</sup>祭<sup>ニ</sup>の<sup>ニ</sup>解<sup>ニ</sup>を<sup>ニ</sup>脱<sup>ニ</sup>  
○廿三丁<sup>ニ</sup>申<sup>ニ</sup>出<sup>ニ</sup>の<sup>ニ</sup>は<sup>ニ</sup>行<sup>ニ</sup>同<sup>ニ</sup>丁<sup>ニ</sup>令<sup>ニ</sup>遇<sup>ニ</sup>合<sup>ニ</sup>遇<sup>ニ</sup>の<sup>ニ</sup>合<sup>ニ</sup>合<sup>ニ</sup>誤<sup>ニ</sup>○廿四丁<sup>ニ</sup>奉<sup>ニ</sup>納<sup>ニ</sup>セ<sup>ニ</sup>ハ<sup>ニ</sup>奉<sup>ニ</sup>納<sup>ニ</sup>セ<sup>ニ</sup>ヤ<sup>ニ</sup>ワ<sup>ニ</sup>ラ  
カ<sup>ニ</sup>ヤ<sup>ニ</sup>ハ<sup>ニ</sup>ラ<sup>ニ</sup>カ<sup>ニ</sup>標<sup>ニ</sup>配<sup>ニ</sup>には<sup>ニ</sup>て<sup>ニ</sup>の<sup>ニ</sup>は<sup>ニ</sup>行<sup>ニ</sup>○廿六丁<sup>ニ</sup>ス<sup>ニ</sup>ヘ<sup>ニ</sup>立<sup>ニ</sup>ス<sup>ニ</sup>エ<sup>ニ</sup>立<sup>ニ</sup>剛<sup>ニ</sup>イ<sup>ニ</sup>は<sup>ニ</sup>剛<sup>ニ</sup>イ<sup>ニ</sup>○廿七丁<sup>ニ</sup>高<sup>ニ</sup>ク<sup>ニ</sup>ス  
ヘ<sup>ニ</sup>高<sup>ニ</sup>ク<sup>ニ</sup>ス<sup>ニ</sup>エ<sup>ニ</sup>○廿八丁<sup>ニ</sup>天<sup>ニ</sup>才<sup>ニ</sup>標<sup>ニ</sup>配<sup>ニ</sup>の下<sup>ニ</sup>に<sup>ニ</sup>奉<sup>ニ</sup>ラ<sup>ニ</sup>ル<sup>ニ</sup>の<sup>ニ</sup>四<sup>ニ</sup>字<sup>ニ</sup>を<sup>ニ</sup>脱<sup>ニ</sup>廿丁<sup>ニ</sup>横<sup>ニ</sup>ハ<sup>ニ</sup>レ<sup>ニ</sup>ル<sup>ニ</sup>横<sup>ニ</sup>タ<sup>ニ</sup>ハ<sup>ニ</sup>レ<sup>ニ</sup>ル  
○三十一丁<sup>ニ</sup>平<sup>ニ</sup>野<sup>ニ</sup>の<sup>ニ</sup>平<sup>ニ</sup>一<sup>ニ</sup>字<sup>ニ</sup>符

中卷

○三丁<sup>ニ</sup>登<sup>ニ</sup>と登<sup>ニ</sup>タ<sup>ニ</sup>同<sup>ニ</sup>丁<sup>ニ</sup>率<sup>ニ</sup>と率<sup>ニ</sup>○四丁<sup>ニ</sup>天<sup>ニ</sup>津<sup>ニ</sup>日<sup>ニ</sup>嗣<sup>ニ</sup>乎<sup>ニ</sup>の<sup>ニ</sup>は<sup>ニ</sup>、<sup>ニ</sup>瑞<sup>ニ</sup>穂<sup>ニ</sup>之<sup>ニ</sup>國<sup>ニ</sup>乎<sup>ニ</sup>の<sup>ニ</sup>は<sup>ニ</sup>○同<sup>ニ</sup>丁<sup>ニ</sup>  
按に云々衍<sup>ニ</sup>○五丁<sup>ニ</sup>奥<sup>ニ</sup>ノ<sup>ニ</sup>は<sup>ニ</sup>奥<sup>ニ</sup>○同<sup>ニ</sup>丁<sup>ニ</sup>標<sup>ニ</sup>配<sup>ニ</sup>を<sup>ニ</sup>と<sup>ニ</sup>共<sup>ニ</sup>に<sup>ニ</sup>云<sup>ニ</sup>々<sup>ニ</sup>の<sup>ニ</sup>上<sup>ニ</sup>に<sup>ニ</sup>接<sup>ニ</sup>お<sup>ニ</sup>御<sup>ニ</sup>殿<sup>ニ</sup>乎<sup>ニ</sup>の<sup>ニ</sup>手<sup>ニ</sup>ハ<sup>ニ</sup>次<sup>ニ</sup>の<sup>ニ</sup>一<sup>ニ</sup>小<sup>ニ</sup>段<sup>ニ</sup>  
を<sup>ニ</sup>隔<sup>ニ</sup>て<sup>ニ</sup>、<sup>ニ</sup>其<sup>ニ</sup>段<sup>ニ</sup>末<sup>ニ</sup>に<sup>ニ</sup>あ<sup>ニ</sup>る<sup>ニ</sup>へ<sup>ニ</sup>さ<sup>ニ</sup>の<sup>ニ</sup>廿<sup>ニ</sup>五<sup>ニ</sup>字<sup>ニ</sup>脱<sup>ニ</sup>又<sup>ニ</sup>皇<sup>ニ</sup>神<sup>ニ</sup>祭<sup>ニ</sup>は<sup>ニ</sup>皇<sup>ニ</sup>神<sup>ニ</sup>條<sup>ニ</sup>○七丁<sup>ニ</sup>二<sup>ニ</sup>靈<sup>ニ</sup>ヲ<sup>ニ</sup>は<sup>ニ</sup>二<sup>ニ</sup>靈<sup>ニ</sup>ノ<sup>ニ</sup>○八丁<sup>ニ</sup>柔<sup>ニ</sup>  
肩<sup>ニ</sup>ハ<sup>ニ</sup>弱<sup>ニ</sup>肩<sup>ニ</sup>○同<sup>ニ</sup>丁<sup>ニ</sup>大<sup>ニ</sup>直<sup>ニ</sup>靈<sup>ニ</sup>と大<sup>ニ</sup>直<sup>ニ</sup>靈<sup>ニ</sup>○十丁<sup>ニ</sup>口<sup>ニ</sup>令<sup>ニ</sup>合<sup>ニ</sup>結<sup>ニ</sup>と口<sup>ニ</sup>令<sup>ニ</sup>合<sup>ニ</sup>給<sup>ニ</sup>同<sup>ニ</sup>標<sup>ニ</sup>配<sup>ニ</sup>岩<sup>ニ</sup>間<sup>ニ</sup>の<sup>ニ</sup>下<sup>ニ</sup>ノ<sup>ニ</sup>戸<sup>ニ</sup>を<sup>ニ</sup>脱<sup>ニ</sup>○十  
一丁<sup>ニ</sup>法<sup>ニ</sup>と法<sup>ニ</sup>○十三丁<sup>ニ</sup>標<sup>ニ</sup>記<sup>ニ</sup>犯<sup>ニ</sup>字<sup>ニ</sup>を<sup>ニ</sup>字<sup>ニ</sup>の<sup>ニ</sup>ま<sup>ニ</sup>、<sup>ニ</sup>に<sup>ニ</sup>出<sup>ニ</sup>し<sup>ニ</sup>つ<sup>ニ</sup>は<sup>ニ</sup>犯<sup>ニ</sup>字<sup>ニ</sup>ニ<sup>ニ</sup>兩<sup>ニ</sup>訓<sup>ニ</sup>ヲ<sup>ニ</sup>施<sup>ニ</sup>し<sup>ニ</sup>つ<sup>ニ</sup>○同<sup>ニ</sup>丁<sup>ニ</sup>暴<sup>ニ</sup>動<sup>ニ</sup>ビ<sup>ニ</sup>と  
暴<sup>ニ</sup>動<sup>ニ</sup>ビ<sup>ニ</sup>○十五丁<sup>ニ</sup>國<sup>ニ</sup>中<sup>ニ</sup>之<sup>ニ</sup>國<sup>ニ</sup>中<sup>ニ</sup>、<sup>ニ</sup>起<sup>ニ</sup>シ<sup>ニ</sup>と起<sup>ニ</sup>シ<sup>ニ</sup>○同<sup>ニ</sup>丁<sup>ニ</sup>犯<sup>ニ</sup>セ<sup>ニ</sup>ル<sup>ニ</sup>と犯<sup>ニ</sup>セ<sup>ニ</sup>ル<sup>ニ</sup>○十六丁<sup>ニ</sup>座<sup>ニ</sup>置<sup>ニ</sup>と座<sup>ニ</sup>置<sup>ニ</sup>○置  
座<sup>ニ</sup>と座<sup>ニ</sup>置<sup>ニ</sup>○十七丁<sup>ニ</sup>天<sup>ニ</sup>下<sup>ニ</sup>中<sup>ニ</sup>之<sup>ニ</sup>天<sup>ニ</sup>下<sup>ニ</sup>中<sup>ニ</sup>○十八丁<sup>ニ</sup>不<sup>ニ</sup>在<sup>ニ</sup>止<sup>ニ</sup>と○二十丁<sup>ニ</sup>標<sup>ニ</sup>配<sup>ニ</sup>謂<sup>ニ</sup>之<sup>ニ</sup>史<sup>ニ</sup>之<sup>ニ</sup>謂<sup>ニ</sup>之<sup>ニ</sup>史<sup>ニ</sup>○同  
丁<sup>ニ</sup>二十八宿<sup>ニ</sup>とシ<sup>ニ</sup>ウ<sup>ニ</sup>炎<sup>ニ</sup>帝<sup>ニ</sup>と赤<sup>ニ</sup>帝<sup>ニ</sup>○標<sup>ニ</sup>記<sup>ニ</sup>災<sup>ニ</sup>害<sup>ニ</sup>と災<sup>ニ</sup>害<sup>ニ</sup>○廿三丁<sup>ニ</sup>耻<sup>ニ</sup>之<sup>ニ</sup>耻<sup>ニ</sup>○廿四丁<sup>ニ</sup>生<sup>ニ</sup>置<sup>ニ</sup>と生<sup>ニ</sup>置<sup>ニ</sup>  
氏<sup>ニ</sup>、<sup>ニ</sup>剛<sup>ニ</sup>は<sup>ニ</sup>剛<sup>ニ</sup>○同<sup>ニ</sup>丁<sup>ニ</sup>皇<sup>ニ</sup>御<sup>ニ</sup>孫<sup>ニ</sup>命<sup>ニ</sup>の<sup>ニ</sup>皇<sup>ニ</sup>の<sup>ニ</sup>字<sup>ニ</sup>に<sup>ニ</sup>の<sup>ニ</sup>符<sup>ニ</sup>を<sup>ニ</sup>脱<sup>ニ</sup>○廿七丁<sup>ニ</sup>柔<sup>ニ</sup>と柔<sup>ニ</sup>剛<sup>ニ</sup>之<sup>ニ</sup>剛<sup>ニ</sup>○廿八丁<sup>ニ</sup>官<sup>ニ</sup>員<sup>ニ</sup>等<sup>ニ</sup>は<sup>ニ</sup>  
官<sup>ニ</sup>員<sup>ニ</sup>等<sup>ニ</sup>○班<sup>ニ</sup>幣<sup>ニ</sup>と班<sup>ニ</sup>幣<sup>ニ</sup>○標<sup>ニ</sup>記<sup>ニ</sup>下<sup>ニ</sup>卵<sup>ニ</sup>と下<sup>ニ</sup>卵<sup>ニ</sup>○同<sup>ニ</sup>丁<sup>ニ</sup>神<sup>ニ</sup>と神<sup>ニ</sup>○鎮<sup>ニ</sup>仕<sup>ニ</sup>は<sup>ニ</sup>鎮<sup>ニ</sup>在<sup>ニ</sup>○三十丁<sup>ニ</sup>ヤ<sup>ニ</sup>ワ<sup>ニ</sup>キ<sup>ニ</sup>とヤ<sup>ニ</sup>ハ  
キ<sup>ニ</sup>○三十一丁<sup>ニ</sup>標<sup>ニ</sup>記<sup>ニ</sup>緒<sup>ニ</sup>等<sup>ニ</sup>と緒<sup>ニ</sup>等<sup>ニ</sup>○三十二丁<sup>ニ</sup>幣<sup>ニ</sup>物<sup>ニ</sup>と幣<sup>ニ</sup>物<sup>ニ</sup>○同<sup>ニ</sup>丁<sup>ニ</sup>詞<sup>ニ</sup>祝<sup>ニ</sup>と祝<sup>ニ</sup>詞

下卷

○目次内親は内親王○二丁<sup>ニ</sup>進<sup>ニ</sup>給<sup>ニ</sup>布<sup>ニ</sup>の<sup>ニ</sup>進<sup>ニ</sup>字<sup>ニ</sup>に<sup>ニ</sup>の<sup>ニ</sup>符<sup>ニ</sup>を<sup>ニ</sup>脱<sup>ニ</sup>○三丁<sup>ニ</sup>縹<sup>ニ</sup>ル<sup>ニ</sup>布<sup>ニ</sup>は<sup>ニ</sup>布<sup>ニ</sup>○四丁<sup>ニ</sup>標<sup>ニ</sup>記<sup>ニ</sup>皇  
大神<sup>ニ</sup>と皇<sup>ニ</sup>大神<sup>ニ</sup>宮<sup>ニ</sup>○五丁<sup>ニ</sup>國<sup>ニ</sup>中<sup>ニ</sup>は<sup>ニ</sup>國<sup>ニ</sup>中<sup>ニ</sup>○同<sup>ニ</sup>丁<sup>ニ</sup>標<sup>ニ</sup>記<sup>ニ</sup>大<sup>ニ</sup>御<sup>ニ</sup>酒<sup>ニ</sup>の<sup>ニ</sup>事<sup>ニ</sup>なり<sup>ニ</sup>は<sup>ニ</sup>大<sup>ニ</sup>御<sup>ニ</sup>酒<sup>ニ</sup>の<sup>ニ</sup>事<sup>ニ</sup>なり<sup>ニ</sup>○と<sup>ニ</sup>丁<sup>ニ</sup>標

配伊勢大神相。管は神嘗○進給布の進字に○十丁。標記税。懸は懸税○十一丁。相方之  
 双方○同丁。マツマはマツマ○准ラフのヲは衍○十二丁。標記大政官と太政官○統属なるは  
 と統属なるを○十三丁。標記殿内は殿内○同丁。大降は天降○十六丁。マツマはマツマ○十七  
 丁。横ハレルは横ハレル○廿丁。大政は太政標記も同○同丁。博は博○廿二丁。柔は柔○同  
 丁。其中は某甲○廿三。排ヲハ排○焼ヲハ火ノのハ衍○廿五丁。標記。聖解云ノ上ノ  
 。誤○廿六丁。標記二翌は二翼○乘斬は乘軒○廿七丁。意志は意志○標記Sと。はSとく  
 ○廿八丁。擊持氏。の。は。○神賀の。は。○廿九丁。標記儀。解は儀解○三十二丁。標記王。申は王  
 申○卅三丁。申ヌヨツは申ヌマツ○卅四丁。標記補。清は補清○卅五丁。侍は侍○同丁。仕ツマ  
 は仕ツマツル

活版の常として文字の誤脱多ければ如此取出て正誤を添  
 ふるもの、猶洩し致せる事のあらひは見む人正してよ

明治十七年三月

校閱者

延喜式祝詞註解正誤畢

明治十七年二月七日御届  
 同年三月三十日出板

定價壹圓拾錢

撰述人

水野秋彦

美濃縣士族

常陸國西茨城郡笠間桂町  
 三百五十四番地

校閱者

宮崎康斐

愛媛縣伊予

廣肢國三野郡財田上村  
 二千三百四拾五番地

出版人

新居政七

愛媛縣士族

廣肢國香川郡波ノ丁  
 九拾二番地

